
IS ～織斑一夏は負完全～

大凶吉 神籤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 織斑一夏は負完全

【Nコード】

N6621V

【作者名】

大凶吉 神籤

【あらすじ】

「『IS』？ あの女性にしか扱えない『欠陥兵器』筆頭の事かい？ え？ 僕が世界で唯一の男性操縦者？ —— へえ、いいじゃない。『欠陥兵器』ねえ……不完全で、腐完全で、負完全な駄目人間代表の僕に、とても似合ってるとは思わないかい？」

一夏性格改変モノとなっております。そう言うのが苦手な方はご注意ください。

「はーあ面倒臭い」

窓もなく、埃っぽい小さな部屋。

天井につり下がってる小さな裸電球が唯一の光源だった。

そんな部屋に充満する、むせかえるような生臭い鉄の匂い。

床に倒れ伏すは体中に傷を残し、大量の出血をしている数名の男達。皆手には銃やナイフなどの凶器が握られているが、すでにその手に力は入っていない。

そんな男達の上に座ってるのは、まだ幼さの抜けきらない中学生くらいの一人の少年。

男達と同様、彼も体中に傷を負ってはいるが、平然としている所を見るとそれほど深いものではないのだろう。

だがその服は返り血で真っ赤に染まっていた。

その顔には狂気が張り付いている。

突如、轟音と共に壁が崩れた。

少年の目に入ってきたのは、目が眩む程の太陽の光と、近代ロボットアニメの様な鎧を身につけた少年の姉だった

「——！！」

彼女は最愛の弟の——少年の名を呼ぶ。

そして、狂気に染まり微笑みを浮かべる少年——弟を見つけた。

彼女の目が、驚愕に見開かれる。
そんな姉の様子を見た少年は、さらに深く、優しい微笑みを浮かべる。

——嗚呼、姉さん。僕は——

「あーあ、全く、ついてないなあ」

白い制服に身を包んだ黒髪の少年は、路地裏に寝転がっていた。勿論、好き好んで寝転がっているわけではない。

彼はつい五分ほど前まで筋肉隆々ないかついお兄さん達に絡まれ、恐喝にあっていたのだ。

制服という身なりから分かる通り、少年は学生という身分である。当然、学生の彼がそんなお兄さん達を満足させられるような金額を持っているはずもなく、彼は理不尽な暴力の雨を浴びた。

「うわー、制服汚れちゃったよ。白だから目立つなやっぱり。学ランにしてくれば良かったのに」

だが、そんな暢気な事を言う彼からは、そんな事実は微塵も感じさせない。

制服は所々汚れ、顔にも幾つか擦り傷はあるものの、「転んだ」だけでも言えば誰しもが納得するような程度のものだった。

「まあ、いいか。暴力と暴言は親友みたいなものだしね」

何の気なしに少年は言うど、制服の埃を落とし立ち上がる。彼は携帯電話を取り出し、時間を確認する。

「うーん、完全に遅刻だ。もう入学式始まっちゃってるよ」

口ではそう言うものの、少年に焦った様子はない。

「はーあ面倒臭い。もうサボろうかなあ。でもバレて姉ちゃんに連絡いったら怒られるだろうなあ。……………仕方ない、行こうか」

彼は携帯を制服のポケットにしまうと、路地を抜けその場を立ち去った。

残ったのは、無惨な姿で苦しそうに呻き声を上げ地面に転がっている、お兄さん達だけだった。

「はい、皆さん揃ってますね。それでは、S H Rを始めます」

4月、I S学園。

一年一組の教室では、晴れてI S学園への入学を果たした生徒達は、副担任である山田真耶からこの学園に置いての注意事項などを説明されていた。

だが一年一組の生徒達は、どこか落ち着かないというか、終始ソワ

ソワした様子だった。

その理由は、教室前列の中央にある、たった一つの空席にあった。

——インフィニット・ストラトス。通称『IS』。

かつて起こった『白騎士事件』と呼ばれた事件以降、その名と性能の高さを世界中に轟かせ、世界の軍事バランスをまるでちゃぶ台かとツツコミを入れたくなるほど簡単にひっくり返したマルチ・フォーム・パワードスーツ。

本来は宇宙開発用の物として発明されたようだが、今ではもっぱら兵器（アラスカ条約で兵器利用は禁止されているが、あつてないようなものだろう）としての用途が殆どである。

IS学園とは、その名の通りISの扱いを学ぶための学園である。世界でも日本にしかない（開発者である篠ノ之博士が日本人だからとか、理由は云々）ため世界中から生徒が集まる。

だが、このIS。『性能』という面から言えば優秀ではあるが、『兵器』という面で言えば欠陥品である。何故か。

『女性にしか動かすことができない』からだ。

これにより、世界は女尊男卑の世界へと変わった。

男性の操縦者を生み出すための研究を行った機関もあつたであろうが、成果は上がらなかった。

だが一ヶ月前、世界を震撼させる出来事が起きた。

——ISを動かす事ができる男性の発見である。

それがIS学園一年一組の空席の主、『織斑 一夏』である。

一年一組の面々の様子を一言で表すとしたら、『落ち着きが無い』が適当だろう。

それは誰が見ても明らかであった。何せ、副担任もどこかソワソワしていたからだ。

『世界で唯一』の男性IS操縦者と同じクラスになれると言うのだからある意味当然だろう。

男性IS操縦者発見のニュースと共に顔写真も世界に公開されたのだが、鼻屑目に見ても彼は整った顔立ちをしており、男っ気のない環境で今までISを学んできた彼女たちにとってこれとない幸運だろう。

だが、その件の男性IS操縦者、織斑一夏は入学式が終わっても、SHRが始まって、彼女たちの前に姿を表すことがなかった。

最初こそソワソワしていた彼女たちも徐々に落ち着きを取り戻し、自己紹介も終盤に差し掛かった頃には、「今日はもう登校してこないのではないか」という気持ちが半分を占め始めていた。

そして、最後の生徒が自己紹介を終え、席に着いたのと同時に、教室の後ろの扉が開いた。

「いやー、すいません。遅れちゃいました」

そんな言葉とは裏腹に、悪びれた様子など欠片も感じさせない口調で、彼――織斑一夏は教室に入ってきた。

「はーあ面倒臭い」(後書き)

——「ちょっと交通事故の現場に出くわしちゃいまして」——

「初めまして、織斑一夏です」

織斑一夏。

彼には両親がいない。

少なくとも、ハッキリ思い出せる記憶の中には、自分の父と母の姿はなかった。

自分を嫌悪し、蔑むような目で自分を見て、理不尽な暴力を浴びせるクラスメイト達の表情^{かお}。

悲しそうな目をしながらも、そんな自分を見捨てずにいた姉——織斑千冬。

自分と心中の構造を同じくするツインテールの幼なじみ。

彼の記憶の中にハッキリと残っているのは、それくらいだった。

しかし、ハッキリとは思いつけなくても、彼は臆気ながら両親のこととは記憶していた。

彼の中の両親との記憶。

しかしそれもまた——暴力の記憶に他ならなかった。

彼の父は一夏の髪を引っ張り、火の点いたタバコを押しつけ、灰皿で殴打した。

母は彼に熱湯を浴びせ、首を絞め、包丁で斬り付けた。

その様子を、当時はまだ歳場も行かなかった織斑千冬は、ただ泣き

ながら見ていることしか出来なかった。

だが彼は、織斑一夏は、それに対し特に何も思わなかった。
友人達もみんなこんな感じだと思っていた。
これが親子のあり方だと思っていた。

これが世間一般でいう所の普通だと思っていた。

だから、受け止めた。

受け止めて、愛した。

自分を蔑むクラスメイト達を。

理不尽と不条理を愛情のように注ぐ両親を。
自分を悲しそうに見つめる姉を。

そんな自分の境遇を、全部まとめて、受け止めて、愛した。

そして、そんな彼を気味悪がった両親は一夏が小学校に上がる頃、
二人の実子を捨てて、姿を消した。

「いやー、すいません。遅れちゃいました」

その声は、一般的に見れば少し高めの、しかしそれでも確かな『男』の声だった。

教室にいる人間の全ての視線が、クラスメイトである唯一の男性操縦者が入ってきた教室後方に注がれる。

そして、その全員がギョツとした。

頭には自分でやったのか乱雑に包帯が巻かれ、右目には医療用の眼帯をしている。

肌の見えている箇所にはいくつも擦り傷があり、歩き方も足を引きずるような不自然なものだ。

つまるところ、彼——織斑一夏は、『满身創痕』という四字熟語がピッタリとあてはまるような状態で登校してきたのだ。

だが、その表情は何も問題ないと言わんばかりに穏やかで儂い笑顔を浮かべているのである。

そのアンバランスさが、彼の印象をどこか不気味にさせた。

「お……織斑君？ その傷はどうしたの？」

副担任である山田真耶が恐る恐る尋ねる。

男性に対して耐性がないのか、必要以上に怯えているようである。

「ああ、ちよつと交通事故の現場に出くわし……ちやいまして。遅刻しちゃいました。あ、そこ僕の席ですか？」

「え、あ、はい。そこが織斑君の席です」
「どうも」

客観的に見れば日本語として成立していない返答をして、一夏は自分の鞆を机の上に置いた。

そこで、未だ自分に視線が注がれている事に気付く。

「……あ、先生、もしかして自己紹介とかもう終わっちゃってたりしますか？」

「え？ ……あ、すみません織斑君！ もしよかつたら自己紹介してくださいますか！？」

一夏の問いにおっかなビックリといった様子で山田真耶は彼に自己紹介を促した。

そんな彼女に一夏は小さく呆れを含んだ笑みを見ると、クルリと体を反転させてクラスメイトたちの方を向く。

好奇と興味が入り交じった視線が一斉に注がれる中、何でもないかのように彼は自己紹介を始めた。

「はじめまして、織斑一夏です。見ての通りよく怪我をする奴ですが、これからよろしくお願いします」

一息にそう言いきると、彼はわざとらしく深々と頭を下げる。

パチパチパチ、と教室内から拍手が起こる。

『もつとないの?』みたいな視線も同時に注がれてはいるが、時間も押していることもあり、織斑一夏はそのまま席についた。

「ふむ、自己紹介は終わったようだな」

織斑一夏が席に着いたのと同時に、教室前方の扉が開き一人のスーツ姿の女性が入ってきた。

瞬間、教室の喧騒が一気に静まりかえり、クラスメイト達に緊張がはしる。

「……………姉さん?」

ただ一人、織斑一夏を除いて。

「山田君、SHRご苦労だった」

「いいえ! 副担任ですので!」

スーツの女性は山田真耶と二、三言交わすと教卓の前に立ち、まる

で演説でもするかのように話し始める。

「諸君、私が織斑千冬だ。君達を一年間で使い物にするのが私の仕事だ。逆らってもいいが私の言うことは絶対に守れ。いいな」

まるで独裁者だな、と一夏は心の中で思う。

こんなのでついていくのは余程の物好きかマゾヒストくらいだろうに。

「キヤアアアアアア！ 本物よ！ 本物の千冬様よ！」

「私ずっとファンだったんです！」

「私は千冬様に会うために来ました！ 北九州から！」

「私お姉様のためなら死ねます！」

訂正、どうやらこのクラスは物好きが多いようだ。

そんなクラスメイト達を見て、千冬は呆れ顔でこめかみを押さえる。

まあ姉さんらしいかと思ったが、思うだけにしておく。

彼の姉は、変なところで鋭いのである。

「（そう言えば、前に球磨川君が言ってた『めだかちゃん』もこんな感じなのかなあ。前に姉さんに会ったときに露骨に嫌な表情かおしながらそんな事言ってたっけ）」

その時、一夏と千冬の視線が不意にあつた。

千冬の視線に一夏は、教室に入ってきたときに見せた儂げな微笑みを返した。

だが千冬はそんな一夏を見て一瞬、それこそ長い付き合いのある人間——例えば、家族——でなければ分らないであろう短い瞬間であつたが、とても悲しそうで、泣き出しそうな表情を見せた。

そんな姉弟の様子を、窓際の席に座る一人のポニーテールの女子が、釈然としない表情で見ていた。

「初めまして、織斑一夏です」（後書き）

——「えー、でもいま『NARUTO』がいいところなんです」

——

「剣道、全国大会で優勝したんだってね。おめでとう」

織斑一夏。

彼の小学生時代を、元クラスメイト達は余り語ろうとはしない。

彼は小学生時代を極めて普通に過ごしたつもりだし、学校での行動を客観的に見てもそれほど特異な行動を取ってはいなかった。

だが、彼のクラスメイト達は、彼を『異端』と判断して、クラスから迫害——と言ってしまえば大げさであろう。いわゆるイジメである。

それは子供の持つ純粋な心で感じ取ったのであろう。

織斑一夏のもつ心の異常さを。異状さを。そして腐敗度を。

勿論入学早々から彼はイジメられていた訳ではない。

小学三年生くらいまでは、周りの友人達と遜色ない普通な子供だったと元クラスメイト達は記憶している。

彼へのイジメは日に日に過激さを増していった。

最初は靴や教科書、小物を隠す程度の物だったが、その嫌がらせは最終的に直接的な暴力という形で落ち着いた。

それでも彼のクラスメイト達は、織斑一夏に対する不快感を拭えなかった。

彼は常に、『いつも通りに』登校してきたからである。

どれだけ物を隠し、捨てようと。

どれだけ罵詈雑言を浴びせようと。

どれだけ暴力を振るおうと。

彼は常に、『いつも通りに』登校してきた。

それどころか、昨日殴られた相手に笑顔で挨拶する程である。

そんな彼が、織斑一夏が、クラスメイト達は恐ろしくて仕方がなかった。

織斑一夏へのイジメは、逆にいじめる側が半ば屈するような形で、小学六年生頃、終わりを迎えた。

被害者の姉である織斑千冬が殆ど家に帰ってこない事もあってか、このイジメの存在を保護者達を知ることとはなかった。

S H R も終わり、十分間の休み時間へと変わった I S 学園。

一年一組教室の前は、それはもう凄いことになっていた。

件の男性操縦者、織斑一夏を一目見ようと同学年の、否、学校中の生徒達が教室前に集合した。

それはまるで初めて日本にパンダがやってきたときの上野動物園を彷彿とさせた。

だが、誰一人として彼に接触しようとするものはいない。

『出し抜きたいけど抜け駆けできない』みたいな状態になっており、全員が全員、遠巻きに彼を見つめているだけに留まっている。

しかし当の本人である織斑一夏はそんな事など何処吹く風。

自分の鞆をゴソゴソとあさりだすと、そこから一冊の漫画雑誌——『週刊少年ジャンプ』を取り出すと、パラパラとページをめくり出す。

そんな彼に近づく、一人のクラスメイトがいた。

「ちょっといいか？」

「ん？」

一夏がジャンプから視線を外し顔を上げると、そこには長い黒髪をポニーテールにまとめた少女が立っていた。彼には、その少女が誰だかすぐに分かった。

「やあやあおやおや、誰かと思ったら箒ちゃんじゃないか」

彼の幼なじみである、篠ノ之箒だった。

「一体どうしたんだい？　僕に何か用？」

「ああ、ちょっと話したい。できれば別の場所がいいんだが……」

彼女は、数年来に再会した幼なじみと、できれば人目のない場所です話したかった。

「えー、でもいま『NARUTO』がいいところなんだけど」

そんな彼女の思いは、少年漫画の内容の前に一蹴された。

「っ……………！」

まさか断られるとは思ってなかったのか、彼女は鋭い目つきで織斑一夏を睨み付ける。

「いいから来い！」

「あ」

彼女は一夏からジャンプを取り上げると、ズンズンと教室から出て行ってしまふ。

「ああっ待って篤ちゃん！ そんな乱暴に持ったら破れる！ ページ破れるから！ まだ全部読んでないから！」

織斑一夏はそんな彼女を急いで追いかけた。

IS学園屋上。

織斑一夏と篠ノ之箒は其処にいた。

箒は外の景色をジッと見つめ、一夏は手すりに寄りかかってパラパラと返して貰った『週間少年ジャンプ』を読み流している。

「……………」

「……………」

お互いに無言の時間が続く。

箒はチラチラと一夏に視線を送っているのだが、彼はそれに気付いているのかいないのか、ジャンプから目を離さない。

「……………」
「……………」

痺れを切らした一夏は、パタンと音を立ててジャンプを閉じ、溜め息をついた。

「呼び出しておいて無言っていうのは幾ら何でもないんじゃない筈ちゃん？ これは六年ぶりに再会した幼なじみいやがらせに対する愛情表現かい？」
「っ……！」

一夏の言葉にギリりと固まる筈。
その表情には緊張と罪悪感が入り交じっている。

六年前、彼女は織斑一夏をいじめていた一人だった。
一夏と彼女は幼少期からの付き合いだったし、同じ道場に通って一緒に剣道を習った仲だ。

勿論彼女は最初から彼のイジメに荷担していた訳ではない。
彼へのイジメが始まった頃は、筈は彼を守ろうと必死になった。

だが彼女は、一夏を守ろうとしていくうちに、彼の気味悪さに遅かれながら気付いた。

彼女が一夏に恋をしていた、というのも彼の異常さに気付くのが遅れた理由の一つといえるだろう。

学友達からどんなことをされようと、抵抗する素振りもなく、全てを受け入れ笑っている彼の姿に、篠ノ之筈は底冷えするような恐怖

を覚えた。

そうして彼女が転校してしまう小学四年生まで、彼女は織斑一夏をイジメ続けた。

彼女が一夏を呼び出した理由は謝りたかったからだ。

別れ方としては最悪の別れ方をしてしまった幼なじみに、ただ謝りたかった。

彼の性格が、心が、少しでも改善されていることを願いながら。

「一夏……………そのだな……………」

「あ、そうだ」

話を切り出そうとした筈を遮って、一夏は思い出した様に言う。

「剣道、全国大会で優勝したんだってね。おめでとう」

一夏は彼女に儂げな微笑みと共にそう言った。

「っ!!」

だが、彼女の表情にあるのは、彼が自分のことをキチンと知ってくれた、と言う喜びのものではない。

困惑と驚愕だった。

「なんで……………」

「ん？ ああ、新聞を読んでいたらたまたま見つけたんだ。顔写真も載ってたからすぐ分かったよ」

彼は微笑みを崩すことなく続けた。

だが、彼女が聞いたかったのはそんな事じゃない。

——なんで。

——なんで、自分をいじめていた奴に、そんな風に笑いかけられるんだ。

——なんで、自分をいじめていた奴に、何でもないように話しかけられるんだ。

「一夏——」

彼女が言葉を紡ごうとしたその時、

キンコーンカーンコーン

予鈴の鐘が、学園中に響き渡った。

「ん。そろそろ授業始まっちゃうね、戻ろっか。姉さんに叱られちゃうしね」

「あ——」

一夏は箒を置いて、スタスタとその場を去ってしまった。
箒はそんな彼に付いていくことができず、その背中を見送った。

恋した相手をいじめるというのは。
いじめていた相手に恋をするというのは。

一体、どんな気持ちなのだろうか。

それは、篠ノ之箒にしか分からない、複雑な感情である。

「剣道、全国大会で優勝したんだってね。おめでとう」(後書き)

——「友情は、共有しなくちゃね」——

「なるほど。わからん」

夕暮れの、もう生徒の殆どが下校し、人影の無くなった小学校の校舎裏。

一人の男子生徒が、同じ歳くらいの子達六、七人に囲まれていた。囲まれている少年の名は織斑一夏。

囲んでいるのは彼のクラスメイトである。

彼らはここで毎日のように織斑一夏に一方的に暴力を振るっていた。いわゆるイジメである。

一夏の顔や半袖のシャツから出ている腕には青あざや擦り傷がいくつもできている。

服の下には、もっと酷い痣や傷があるのだろう。

そして、一夏を取り囲んでいるクラスメイト達の腕や顔にも、同様に痣や傷が浮かんでいる。

一方的に暴力を振るっていたのにも関わらず、だ。

「ふふふ、痛いなあ」

学友の一人に殴られ、地面に倒れていた一夏がゆっくりと、微笑みを浮かべたまま起きあがる。

「この間ドラマでやってたよ。男はこうやって喧嘩して、自分たちの間にある友情を確かめ合うんだよね？」

クラスメイト達の顔に、恐怖と嫌悪の表情が浮かぶ。

そんな彼らの表情など見えていないかのように、一夏は微笑みを崩さないまま続ける。

「つまり、みんながこうやって僕の事を殴ったり、蹴ったり、金属バットで叩いたり、僕に理科室から盗み出した薬品をかけたたりするのも、僕とみんなの間にある固い友情の裏返しなんだよね？」

『小学生のイジメ』、という一言では済まされないほどの、度を越えた行為。

その被害者であるはずの彼は、それを嬉しそうに語る。まるで自分に向けられた好意のように。

「だから、」

彼の微笑みは、更に深くなる。

「友情は、共有しなくちゃね」

「（ふーん、なるほど。わからん）」

授業開始を告げるチャイムと共に教室に帰ってきた織斑一夏は、千冬に鋭く睨まれながらも気にした様子は無く、何事もなかったかのように自分の席に着いた。

そうして始まった織斑一夏のIS学園における初授業だが、どうやら幸先のいいスタートとは言えないようだ。

「（姉さんから送られてきた基礎知識みたいなのがギッシリ詰め込まれた教科書には目は通したけど、そんなの一週間前に送られても、覚えられないよ普通）」

彼の中にあるISの知識は、付け焼き刃もいいところだった。男であるが故に、ISに触れる機会など一度もなかったと言えば、それも当然なのだが。

そもそも何故、織斑一夏がISを操縦できることが判明したのか。彼は元々、『藍越学園』という私立高校を受験するつもりだった。しかし受験当日、カンニング対策という名の下行われた受験会場の割り振りによって、道に迷ってしまった。

話が長くなるので割愛するが、要約すると、「『藍越学園』と『IS学園』って何か似てるね」という話である。

今さらながら、自分のドジと不幸指数の高さに感心する。

悲観したりはしない。

不幸と不運を地で行くのが織斑一夏である。マイナス

「おつ、織斑君っ!」

そんな彼の思考は、副担任である山田真耶の声によって遮られた。

「はい?」

「あの……何処か分からない所があれば、遠慮せずに質問して下さいね?」

ニコッ、と言う擬音が付きそうな笑みを浮かべて、目の前の副担任

はそう言ってきた。

――嗚呼。

――この人は、なんて無防備なんだろう。

――なんて優しいんだろう。

――嬉しいなあ。

――壊^{アイ}シタクナツテクルナア。

ゾクッ、と。

一年一組に、底冷えするような悪寒が走った。

「お……………オリムラ……………くん？」

カチカチと、彼の周りに居た生徒達の歯が鳴るのが聞こえる。

ヒツ、と誰かが小さく悲鳴を漏らすのが聞こえる。

それが聞こえているのか、一夏は微笑みを浮かべて言う。

「ありがとうございます、先生。ではお言葉に甘えて、放課後まとめて聞きにいつでもいいですか？」

織斑一夏は先程と変わらない儚げな笑みを浮かべている。
だがその笑みが孕んでいるのは、凶器のような鋭さと、狂気のようなドス黒さだった。

「は、はい、そっそれが、教師の仕事ですっから……………」

山田真耶は恐怖に怯えながらも、何とか返事をする。

すでに目には涙が溜まり、今にもこぼれ落ちそうではあったが。

その時、

ヒュンと風切り音を立てて、織斑千冬は一夏に向かって、手に持った出席簿を振り下ろした。

が、それは読んでいたと言わんばかりに、彼は上体を少し反らすことでそれを回避した。

「織斑……………今のはどういっつもりだ？」

千冬は、怒気を含んだ声で、一夏にそう尋ねた。

「どういっつもり？ どうもこうもないですよ、織斑先生。僕が何をしたって言うんですか？」

「とぼけるな。ならばさっきの——」

「それに、教師がいきなり暴力とは感心しませんよ。教師が率先して暴力なんて振るったら、どうなることか」
「っ……！」

一夏の言葉に、千冬の表情が固まる。
そんな彼女を見て、一夏は儚げな笑みを更に深める。

「……………もういい、座れ、織斑」
「はい」

教室には、何とも言えない空気が流れていた。
織斑一夏が座ったタイミングで授業終了のチャイムが鳴ったのが、
せめてもの救いだった。

「なるほど。わかん」(後書き)

——「ちゅっちゅっへっへっ?」——

「よろしくないよ」

バシッと乾いた音が、道場に響く。

そこには、髪を短く切りそろえた小学生の男の子と、長い髪をポニテールにまとめた同じ歳くらいの女の子がいた。

互いの手には、竹刀が握られている。

「たるんでるぞ一夏！！ 女に負けるとは情けない！！」

「痛タタ…………… 箒ちゃんが強いんだよ……。それに僕くらい
の歳なら力に男女差あんまりないよ」

「言い訳無用！！ 男が女より弱くてどうする！！ 立てっ！！」

ブツブツと小言を言いながら、一夏と呼ばれた男の子が立ち上がる。
それについて女の子は「ブツブツ言っな！！」と怒りをあらわにする。

だが、口調とは裏腹にお互いの顔は何処か楽しそうだった。

「いくぞ一夏！！」

「どうかお手柔らかにっ！！」

そうしてまた、二人は竹刀を構え、合図も無しに試合が始まった。

これはまだ、織斑一夏が他人に対して、

周囲に対して、

友人に対して、

幼なじみに対して、

姉に対して、

普通の振り^{ウンをついて}をしていた頃の、ほんの歪んだワンシーン。

最後に一悶着あったものの二時間目も無事終了し、再び休み時間がやってきた。

先程の休み時間同様、廊下は一夏目当ての生徒で溢れかえっていた。

しかし一夏にはそんな物など目には入っていないようで、全く気にせず『週刊少年ジャンプ』を読んでいる。

今にも消えそうな程儚げな笑みを絶えず浮かべている一夏。

それを見た廊下に居る生徒達は、キヤイキヤイと騒ぎ出す。

だが、一年一組の生徒は先程の授業の事もあってか、その笑みに薄ら寒さを感じ、近寄りがたいようだ。

そんな空気など関係ないと言わんばかりに、織斑一夏に近づき、一人の生徒がいた。

「ちよつとよろしくて？」

長い金髪を縦ロールにまとめた少女——イギリス代表候補生、セシリア・オルコットだった。

彼女が、彼に声を掛けた理由は、単純な好奇心だった。

世界で唯一の男性操縦者——織斑一夏がどんな人物なのか。

彼女は少しながら織斑一夏に期待した。

だが、その期待はすぐに打ち砕かれた。

入学式にもHRにも遅刻し、なおヘラヘラしている不真面目な態度。今まで見てきた男性よりも弱々しい雰囲気。

正直彼が、あの織斑千冬の弟だとは思えなかった。

だが、先程織斑一夏から感じた、あの底冷えするような恐怖。触れた途端に切り刻まれそうな鋭い彼の雰囲気。

それはセシリア・オルコットが今まで男性から、否、生涯の中で一度も感じたことのないものだった。

その正体を確かめるべく、彼女は一夏に声を掛けた。

さて、そんな思惑を持って話しかけてきた彼女の問いかけに、織斑一夏は

「よろしくないよ」

ジャンプから全く目を離さずに即答した。

0・1秒の間も空けない見事な即答だった。

まさかこんな見事な即答が、しかも拒否が帰ってくるとは思わなかったセシリア・オルコットは数秒の間ポカンとしていたが、すぐに一夏の言葉を理解し、気を取り直す様に咳払いをしてもう一度一夏に声を掛けた。

「ちよつとよろしくて？」

「よろしくないよ」

またも即答された。

しかし二回目とあってかこの返答は既に予想していたセシリア・オルコット。

今回は動揺した様子など全く見せずに続ける。

「貴方の都合など聞いてませんわ」

「君の用事なんてどうでもいいんだけどね。今、『ONE PIECE』が大詰めなんだ。邪魔しないでくれ」

またしても、即答。

しかも、少年漫画の内容の前に、用件も聞かれず一蹴された。デジャヴであった。

彼のこの態度に、セシリアはヒクヒクと顔を引きつらせた。

しかしいつまで経っても自分の席から去らないセシリアに流石に嫌気が差したのか、一夏はジャンプをパタンと閉じると、初めてセシリアに目を向ける。

「で、僕に何か用があったんじゃないの？」

「っ!!」

明らかに鬱陶しそうな視線を向ける一夏に、セシリアは声を荒げる。

「貴方っ！ 何ですのそのふざけた態度は！？ この私を『イギリス代表候補生』、セシリア・オルコットと知っての狼藉ですの！？」

彼女は『男性』と言う存在にいい印象を持っていなかった。

自分より強い『女性』^{そんざい}に媚びへつらう事しか出来ない下等な生物。彼女の中の『男性』の認識は、そんな物だった。

「この私に声を掛けられる事だけでも至極光栄なことですよ！？ ならばそれ相応の態度と言うモノがあるでしょう！？」

そして彼女は、現代の『女尊男卑』の風潮を体現したかのような人物だった。

そんな彼女を見て、織斑一夏は露骨に溜め息を漏らす。

「初対面の人間に対してここまで無礼な態度とる人も珍しいけどねえ。それに僕は君の事なんて知らないし、興味ないし」

「なっ！？ この私、入試主席のエリート、セシリア・オルコットを知らないと仰いますの！？」

「僕、入学式の時も自己紹介の時も居なかったしねえ。野暮用に巻き込まれてたし」

自分の頭に巻かれている包帯を指しながら、織斑一夏はそう言った。

「ふん、そんなこと知りませんわ。全く、男性の操縦者がどんな人物かと思っただら、とんだ期待はずれですわ」

失望した様子で、セシリア・オルコットはそう言った。

「過^{ほく}負荷に勝手に期待した君が悪いよ」

織斑一夏はそう言って苦笑した。

「まあ、それでも私は入試主席ですから、あなたがどうしても頼むなら、教えて差し上げてもいいですわよ？何たって、私は入学試験で唯一教官を倒した実力者ですから」

あくまで一夏を見下したように、セシリアは自慢話でもするように言う。

そんな態度をとるセシリアに、

「君がエリートかどうかは知らないけど、君よりこの先生の方が優秀そうだし信用できるから、いいや」

正面から正論で返した。

「それに、僕も教官倒したし」

爆弾のおまけ付きで。

「っ！？ 今、何と仰いました？」

「君がエリートかどうかは知らないけど」

「その後ですわ！」

「僕も教官倒したし」

それは、セシリア・オルコットに取って聞き捨てられない事だった。

「入試って、ISつけて先生と闘うあれでしょ？」

「それ以外にありませんわ」

「ただ勘違いしないでくれよ。僕は教官を『倒してしまった』のであって、『勝った』訳じゃないんだ。あれは、先生が自爆した結果そうなったただだよ」

あの入試は酷いものだったと、一夏は振り返る。

対峙した教官が盛大に加速して肉薄してきたので、普通に半身を引いて避けたら、これまた盛大に後ろの壁に突っ込んで、終了。

僅か六秒の出来事だった。

男性と対峙するという普通ならありえない出来事に動揺したのだから

うか。

今思うと、あれは山田真耶だったのかもしれない。

「わ、私だけと、聞きましたか」

セシリア・オルコットは現実を受け入れたくないのか、ワナワナと口を開く。

「まさかと思うけど、『女子だけ』とか言う読み切り少年漫画でも使われないようなお粗末なオチじゃないよね？」

「——っ！？」

かあっ、とセシリアの顔が真っ赤になる。
そこで、予鈴を告げるチャイムが鳴った。

「っ！ー！ また来ますわ！ 逃げないことね！」

セシリアはそう言つと、一方的に話を打ち切つて、自分の席に戻つてしまった。

「……………逃げようと逃げまいと、何も変わらないよ」

織斑一夏は、ジャンプを鞆の中にしまった。

「よろしくないよ」(後書き)

——「罵倒されるのは、慣れてるからね」——

「君ってさあ」

「『ねえ、ちよつといいかい？』」

「ん？」

夕暮れによって紅く染められた公園。

五時の鐘が街を包む中、織斑一夏は同じ歳くらいの少年に声をかけられた。

「『いやあ、実はこの辺に来るのは初めてでね？』」ちよつとコンビニを探してるんだけど、見つからなくてさ『」

「ああ、コンビニなら、この道を真っ直ぐ行くと右側にあるよ」

一夏は公園から見える大通りを指さして答える。

「『うん、分かった、どうもありがとう』」ところで、君は一体何をやってるんだい？『」

少年は、一夏のしている行為を見て尋ねる。

「何って、見ての通り子猫を愛でてるんだよ」

可愛いでしょ？と、一夏は子猫の頭を優しく撫でる。

「『ふうん、そっか』」

「そうだよ」

「『もう死んでる猫を可愛がるなんて、君も変わってるね』」

少年の言ったとおり、一夏が撫でている子猫は、カラスにでも襲われたのか内臓が飛び出していたり、耳が片方千切れていたりと、小学生には刺激が強いグロテスクな状態になっている。それを彼は、愛おしそうに優しく撫でる。

「この猫、一週間くらい前からこの公園にいてさ。学校帰りによるとミルクでも貰えるのかと思ってるのか僕にすり寄ってくるんだ。多分、他の小学生が憐れんで牛乳でもあげたんだろうね。僕の同級生も何人か見かけたし」

一夏は死体こゑいを撫でる手を休めず続ける。

「それが凄く可愛くてさ、僕学校帰りに牛乳もってここに来るのがここ数日の習慣になってたんだ。けど、今日来てみたらこの通りさ」

でも、と彼は続ける。

「何でかさあ、こんな見るも無惨な姿になっても、コイツを可愛いつて思っちゃうんだよね」

彼は儚げな笑みを浮かべる。

「死ぬ前と死んだ後とで、コイツに対する感情が全く変わらないんだよ」

一夏は、儚げな笑みを深くして、目の前の少年に向き合う。

「この気持ち、分かる？」

「『うん』『凄く分かるよ』」

少年は、無邪気な笑顔で言った。

「本当？」

「『この耳の千切れ具合がいいね、ギリギリで繋がってるのが』『これが完全に千切れてたら駄目だったね、マイナス十点だったよ』」

猫の死体に対し冷静に評価を下す少年を見て、織斑一夏は笑う。

「変わってるね、君も」

「『変わらないさ』『僕たちはそんなにね』」

マイナス
後の大嘘憑きと織斑一夏の出会い。

マイナス
それはとても過負荷らしい、とても歪なものだった。

「では、三時間目の授業を始める前に、クラス代表を決めたいと思う」

三時間目の授業は、一年一組の担任である織斑千冬の一言で始まった。

クラス代表とは、そのままの意味で取ってくれていい。
近日常行われる『クラス対抗戦』や、生徒会が開く定例会議や委員会への出席など……要するにクラス長的な役割だ。

「ちなみに一度決まると変更はないからそのつもりでやれ。自薦他薦は問わない。誰かやる奴はいないか？」

千冬はそう言うと、軽くクラス全体を見渡した。

しかし、今日出会ったばかりの人間の詳しい実力など把握してる訳がない。

それに加え、このクラスには今世界中で話題の人物がいる。

したがって、

「はいっ！ 織斑君を推薦します！」

「あ、私も！」

「私も織斑君がいいと思います！」

織斑一夏が推薦されるのは、ある意味必然であった。

そのクラスのボルテージの上がり方は、先程の出来事など忘れているかのようだった。

そんなクラスメイト達を見て、織斑一夏は苦笑気味に溜め息を吐いた。

「……………では、候補として織斑か。他に誰か居ないか？」

一夏の名前が上がった瞬間、少しだけ険しい表情をした千冬であったが、理由も無しに却下することもできず、保留にして他の立候補者がいないか呼びかけた。

その問いに、生徒達は無言で答え、教室内の空気が『代表は一夏に決定』な感じになった。

「待って下さい！！　納得がいきませんわ！！」

そんな和やかな雰囲気は、セシリア・オルコットがパンツと机を叩き立ち上がったことで粉碎された。

「何故その男の名が真つ先にあがるのですか！！　実力で言えばこのセシリア・オルコットがクラス代表になるのが当然！！　それを物珍しいという理由で極東の猿が代表になったのでは堪りませんわ！！　この私に一年間屈辱を味わえと仰いますの！？」

どうやらセシリア・オルコットは相当プライドが高いようだ。織斑一夏はそんな事をぼーっと考えながら、セシリアが『いかに自分が織斑一夏より優れているか』と言うことをヒステリックにしゃべり続けているのを聞き流していた。

その時、一夏は後ろの席の生徒にチョンチョンと肩を突かれた。

「織斑君いいの？　セシリアさんに色々言われっぱなしで」

どうやら、一夏の事を心配してくれたらしい。
そんな彼女に、一夏は肩を竦めて、セシリアに聞こえないよう答える。

「罵倒されるのは、慣れてるからね。それに、ああ言うのは下手に刺激すると面倒だから」

ああー、と彼女は何となく納得したような返事をする。
一夏は話しかけてきた同級生をいなしつつ、セシリアの様子をチラリと見る。

「(っって、まだ言ってるのか)」

よくボキャブラリーが尽きないな、と一夏は内心感心する。

——しかし、他人に心配されるほどボロクソ言われてたんだ、僕。

他人に心配させるのは良くないな、と思い立つたら即行動。
彼はセシリア・オルコットに言い返すべく、ゆっくりと立ち上がり彼女の方を向く。
突然の彼の行動に教室が静まりかえり、全員が彼の一挙一動に注目する。

「な……………なんですよ、私に何か言うことがありまして!？」

一夏は彼女のそんな言葉には全く反応を示さない。

そして彼は、セシリアに向かってビシッと言う効果音が付きそうな勢いで指を指し、言った。

「君ってさあ、推理小説で一番最初に殺されそうな雰囲気があるよね（笑）」

教室の空気が、完全に凍った。

「君ってさあ」「(後書き)」

「おいおい何を怒っているんだい、オルコットさん」――

「胸くそ悪い勝利だけだよ」

織斑一夏と、織斑千冬。

一夏との関係は何だと聞かれたら、織斑千冬は迷わず姉弟と答える。

彼女にとって一夏は、この世界でたった一人の愛すべき家族だった。一夏が幼い頃、彼は両親から酷い暴行を受けていた。

彼女にその暴行は飛び火しなかったものの、幼さ故にそれを見ていることしか出来なかった当時の自分が、彼女は嫌で嫌で仕方なかった。

そして両親が二人を捨てその姿を消したとき、彼女は決心した。

弟を、織斑一夏を、たった一人の自分の家族を守ろうと。

そのために彼女は、血の滲むような努力をした。

日々ISの訓練に打ち込み、家にも帰らず勉強と鍛錬に時間を費やした。

そしてその努力が実を結び、彼女はIS操縦者の頂点に立った。世界一になった後でも彼女は努力を怠ることなく、鍛錬を続けた。

それが災いしてか、彼女は弟の変化に気づけなかった。

年に数回しか弟に会わない生活が続き、いつしか彼女は自分の中で強さを求める理由が希薄になっていった。

そして彼女が二回目のモンド・クロッソの決勝戦を迎えた時、ドイツから一つの情報が舞い込んできた。

織斑一夏が、誘拐された。

彼女は決勝戦の試合を投げ出して、弟の元へと向かった。

普段の冷静な彼女なら、それがドイツが彼女とパイプを作るためのものだと考え、迂闊な行動はしなかったかもしれない。

だが、最愛の、たった一人の家族が誘拐されたことは、彼女の心を

大きく揺さぶった。

そしてドイツからもたらされた情報を元に、一夏の元へたどり着いたとき、彼女は絶句した。

其処に居たのは床に倒れ伏す数名の大人達と、

体中傷だらけになり血を流しながらも微笑みを浮かべて立っている
一夏。
おしつに

そして、部屋の隅で壁により掛かり、息絶えている一人のIS操縦者だった。

言葉を失い立ちつくしている（ISを操縦した状態なので正確には『浮き尽くしてる』だが）彼女を見て、一夏は微笑みながらこう言
った。

——ああ、姉さん。久しぶり。

彼は、何よりも先に、実姉との久しぶりの再会を、喜んだのだ。

「あ、あ……あ、貴方………っ!!」

セシリア・オルコットは、怒りに震えていた。

それは、目の前にいる男——織斑一夏から放たれた言葉が原因だった。

——「推理小説で一番最初に殺されそうな雰囲気があるよね（笑）」

罵倒になっているのか果てしなく微妙な一言だった。

だが彼女は今ただでさえ自身のプライドが傷つけられ怒りを覚えているのだ。

正直、今の彼女なら何を言われても激怒するだろう。

そして「どうだ、言ってやったぞ」とどこか満足げにしている織斑一夏の表情も、彼女の怒りの炎に油を注いでいた。

「おいおい何を怒っているんだい、オルコットさん。君は散々僕の

ことを好き勝手言ってくれたじゃないか。むしろここまで何も言わず耐えた僕を褒めて欲しいね。スタンディングオベーション拍手喝采を要求してもいいくらいだと思っよ」

まあ殆ど聞いてなかったけど、と彼はコッソリ心の中で付け足した。

「て言うか、自薦他薦問わないんだから自分から立候補すれば良かったじゃないか。何故君は最初から自分がやりたいと一言言わなかったんだい？ 自分の自信の無さの裏返しかい？ 万が一クラス対抗戦で無様な姿をさらしたら母国の名に傷が付くからかい？ あ、分かった。真っ先に自分の名前が上がるって信じて疑わなかったんでしょ？ 自分が代表候補生だから？ 入試主席だから？ うわーセシリアさんイタイ、自意識かつじょーう（笑）。そっかーだからあんなに怒ってたんだね。ゴメンゴメン君がそんなに自分大好きっ娘とは思わなかったよ、うん、これは僕の落ち度だ。思えば僕が悪くなかったこと何て一度もなかった気がするなあ。いやあったなまあそれは置いておこう。と言うわけで織斑先生、セシリアさんの意欲と自主性が溢れんばかりのその心意気に免じて彼女をクラス代表に決定すると言う方向でいいんじゃないでしょうか？」

彼は一息にそう言うのとニコツと織斑千冬に微笑みかけた。

ポカーンと彼の演説を聴いていたクラスの面々はハツと正気を取り戻した。

「あ、ああ、確かに意欲のある生徒を優先するべきだな。では、クラス代表はセシリア・オルコットで決定しようと思う。異存のある

奴はいるか？」

一夏の腐敗度マインナスを知っている千冬は、できれば一夏をクラス代表にするのは避けたかったため、彼から出たその言葉は千冬にしてみれば好都合だった。

が、自分の一存で重要なことを決定するほど彼女は独裁者気質ではない。

彼女はここはサラツと流しさつさと代表を決定したかった。

「——私と決闘なさい。織斑一夏」

だが異存は、以外にも当事者から上がった。

「ここまで虚仮こけにされて何もせずに終わったのではオルコット家の名に、そして母国イギリスの名に傷が付きますわ！！ 私わたくしセシリア・オルコットは、織斑一夏に決闘を申し込みますわ！！」

その目を怒りに染めたセシリアは、一夏に決闘を申し込んだ。そしてその申し出を、

「いいよ」

織斑一夏は『「明日お前ん家行つていい?」「じゃあ午後から」』
みたいなノリで承諾した。

「一夏!」

織斑千冬はそれに焦ったような表情を見せる。

それに対し、一夏は黙って、儚げな笑みで返すだけだった。

「ですが、私も鬼ではありません。少なからず貴方にはハンデを差
し上げますわ」

セシリアは彼を見下したように、まるで情けをかけてやると言わん
ばかりにいった。

それを彼は、

「別にいらないよ」

伝家の宝刀、『即答』で拒否した。

「あら、ハンデも無しに代表候補生に勝てると思って？ まあ、ハンデが有ろうと無かろうと、私の勝利は確定していますよ」
「僕もそう思うよ」

セシリアのその自信と自惚れに満ちた言葉を、意外にも彼は肯定した。
セシリアを含むクラスの面々から、驚愕を含んだ視線が彼に注がれる。

「常識的に考えて、約一ヶ月前までISに触れたことすら無かった僕と代表候補生の君との実力差なんて比べられるわけがない。この決闘は君の勝利で終わるだろう」

「わ、分かっているではありませんか。今なら私の奴隷になるというなら許しても——」

「だから、僕も宣言させてもらおうよ」

一夏はセシリア・オルコットの言葉を遮り、そして高らかに宣言する。

「君が僕との決闘で手に入れるのは——」

——胸くそ悪い勝利だけだよ」

こうして、^{マイナス}織斑一夏と^{スペシャル}セリア・オルコットの決闘が決まった。

「胸くそ悪い勝利だけだよ」(後書き)

——「心配ないよ」——

「フェアなんて求めてないさ」

「い、ち……………か？」

織斑千冬は、目の前の光景に呆然としていた。

目の前には重なるようにして倒れている数名の男。

それに腰掛け、こちらに向かって儚げに微笑む最愛の弟。

そして部屋の奥で息絶えている、『世界最強の兵器・IS』の操縦者。

誰か、この光景をウソだと言ってくれ。

彼女は、そう叫びたくなった。

だが、現実を受け入れられない心が、彼女の声帯を震わせることを許してはくれない。

織斑千冬は不用心にも、ISの装備を解除し、フラフラと覚束ない
おぼつか足取りで一夏へ近づいていった。

「ああ、姉さん。久しぶり」

——なんだ

「もうそろそろ一年くらい会ってなかったかな？　最後に会ったの何時だっけ？」

——なんだ、これは

「あれ？　て言うか姉さん、今日モンド・クロッソの決勝戦じゃなかったわけ？　確か決勝に出てたよね？」

——なんなんだ、これは

「もしかして、僕のこと助けにきてくれたの？　わざわざ決勝戦投げ出して？　もう、馬鹿だなあ姉さんは」

——これは、一体、

「まあ、いいか。どうでも」

織斑一夏は微笑みを崩さぬまま千冬に近づくと、呆然とする彼女を優しく抱きしめた。

「ありがとう姉さん、僕のために」

真っ赤に染めたその手で、返り血のついたその顔で、傷だらけのその体で、

「大好きだよ、千冬姉さん」

まるで恋人を抱きしめるように。

「いち、……………か」

彼女は、恐怖と困惑の混じった声で、彼の名を呼んだ。

そして彼女は、そんな弟を、

震える手で抱きしめ返す事しか、できなかった。

「織斑くん、本当に大丈夫なの？」

三時間目も終わり時は休み時間。

頭の包帯を巻き直している一夏の周りに、数人の同級生達が集まってきた。

「大丈夫って何が？」

「だからセシリアさんとの決闘だよ」

「相手は代表候補生だよ？ 今からでも行ってハンデつけて貰えば？」

そんな事を言う彼女たちに、一夏は呆れ気味に溜め息をついた。

「そんなの必要ないよ。さっきも言ったけど、そんなもの有ろうと無かろうと僕はセシリアさんに勝てる訳ないじゃないか」

「あ、あれ本気で言ってたの！？」

一夏のその言葉に、彼女たちは驚きの表情を表す。
どうやら冗談だと思ってたらしい。

「おいおい、君たちこそ本気でそんなこと言ってるのかい？ 君たちが散々見下してきた男が、いきなりの実戦で代表候補生に勝てるなんて思ってたのかい？」

「で、でも負けること前提で闘うなんて、ねえ」

「ちよつと格好悪いよね」

「心配ないよ」

包帯を巻き終えた一夏はそんな彼女達に向かってシニカルな笑顔を浮かべ言った。

「君たちの期待を裏切るような、最高に最低で、最悪な負け方をし
てきてあげるから」

「織斑、お前の機体だが、しばらく時間がかかる」

四時間目の授業に入る前、織斑千冬は一夏にそう言った。
パチパチと、一夏は強く瞬きをした。ワザとなのかそれとも癖なのか、どちらにせよ驚いているようだ。

「えっと、織斑先生？ それは僕の『専用機』ってことですか？」
「そうだ」

千冬は一夏の問いに短く答える。
その答えに教室中がざわめく。

世界最強の兵器『IS』。

しかし、それには欠点がある。

一つは『女性にしか扱えないこと』。

一夏はこの点からISを『最高の欠陥兵器』と、世の女性達が聞いたら徒党を組んで襲ってきそうなくらい失礼な名称でよんでいる。

そして、ISのもう一つの欠点。

それは、『量産が出来ない』事だ。

ISの機体を造る際、機体には必ず核となる『コア』と呼ばれるものが必要になる。

だが、その『コア』は世界中に467個しかない。

これは、IS制作者である『篠ノ之束』がこの数以上の『コア』を造るのを拒否しているため、『コア』の数はこれ以上増える予定はない。

話を戻すと、つまりISとはその絶対数が限られてくるのだ。

いくら優秀な操縦者が増えてきても、ISの数は増えることはない。そうすると、各国はこぞってISの確保に必死になる。

このことから、今の世の中では『ISの保有数』その国の強さ』という方程式ができあがっている。

そして、それを一人の人間に与えると言うことは、それこそ国家代表候補生などの『選ばれた人間』にしか許されないことである。

だが織斑一夏はIS操縦者としては普通ありえない『男性』ではあるが、彼がISに触れた時間は総合で二時間にも満たない。いわば『素人』である。

そんな『素人』に専用機を与えろというのは、それこそありえないことである。

「先生、そんな専用機なんて特別な物、是非とも拒否したいんですが」

が、あるうことが織斑一夏はその『特別』を、常に浮かべている儚げな笑みを崩さず拒否した。
一夏を除く一年一組の面々は、彼の正気を疑った。

「駄目だ、拒否は認められない」

そして、彼は拒否することを拒否された。

「何故ですか。正直かつたるくて仕方ないんですけど」

「政府からの命令だ。あきらめろ」

「織斑先生、分かってるでしょう。過負荷ほくがそんなものを持ったところで、悲劇マイナスにしかないこと」

「……………」

織斑一夏は未だ微笑みを崩さぬまま続ける。

彼のその言葉に、千冬は眉根に皺を寄せ険しい表情を作った。

「それを聞いて安心しましたわ」

沈黙を破ったセシリア・オルコットが、尚も見下したように一夏に向けて言う。

「私だけが専用機を使っただけではフェアじゃありませんもの。『訓練機だから負けた』なんて言い訳をされたのではたまりませんから」「フェアなんて求めてないさ。過^{ほく}負荷は何時だってアンフェアの中を生きてるんだぜ？」

セシリアの挑発を受け流し、一夏は尚もシニカルに笑う。

「ホント、過^{ほく}負荷なんかのために貴重なコアを使っなんて、篠ノ之博士は何を考えてるんでしょうね？」

彼は肩を竦め、苦笑気味に笑う。

『お前も充分訳分かんねえよ』とは、クラスにいる全員の心の中のツッコミである。

「あのー先生。篠ノ之さんって、もしかして篠ノ之博士の関係者ですか？」

クラスメイトの一人が、おずおずといった様子で千冬に尋ねる。

「そうだ、篠ノ之はアイツの妹だ」

千冬のその言葉にクラスメイト達からキヤーツと感性が上がる。

『ああ姦ばしい、けど悪くないな』などと常人から見れば訳の分からないことを考えながら、一夏はその様子を見守っていた。

授業中だということを忘れて篠ノ之箒の周りに集まるクラスメイトたちに、彼はクスリと苦笑を浮かべる。

そろそろ後ろで出席簿を素振りしている織斑千冬が存在を教えてあげようか、と彼が考え始めたそのとき、

「あの人は関係ないっ！！」

ダンツと机を叩きつけて立ち上がった篠ノ之箒の声が、教室中に響いた。

喧騒が静まりかえり、教室の空気が一気に微妙な空気になる。

先程まで騒いでいたクラスメイト達も揃って何とも言えない表情をしている。

「……………」

篤は何も言わぬまま席に座った。

ゴホンッ、という千冬の咳払いで、騒いでいたクラスメイト達もぞろぞろと自分の席についた。

織斑一夏だけは、終始微笑みを崩さなかった。

「フェアなんて求めてないさ」(後書き)

——「そういう年頃なんだよ」——

「悪いことは言わない」

織斑一夏のこれまでの十五年間を一言で表すならば、『痛み』という二文字が最適であろう。

本人が聞いたらこれに『愛』をプラスするだろうが、今は割愛する。

彼は生まれたときから、『痛み』と共にあった。

誰しも生きていく上で痛みを感じないことはないが、彼はとりわけ『痛み』に愛されていたと言える。

生まれてから六歳前後までは、両親から激しい虐待を受けた。

小学校では、クラスメイトから度を超えたイジメを受けた。

中学校になってからも、彼の学校生活は暴力と理不尽と共にあった。

普通の感性を持つ者ならば、トラウマ確實の人生である。

だが、生まれた時から暴力と痛みと理不尽が全ての世界で彼は生きてきた。

そしてその生活は確実に彼の精神を歪めていった。

両親からの暴力が愛情だった世界で

友人達からのイジメが友情だった世界で

姉の狂おしい程の同情が姉弟愛だった世界で

最初の幼なじみからの嫌悪が思い出だった世界で

そんな狂った世界で生きてきた彼は、確実に精神を過負荷^{マイナス}へと退化^{しんか}させていった。

そして彼は次第に自ら『痛み』を求めるようになった。

端からみたら周囲はそれを『被虐趣味』などと揶揄するだろう。だが、そんな事云々以前に、『痛み』とは彼の一部なのである。

嫌うものではなく愛でるもの。

捨てるものではなく求めるもの。

拒むものではなく受け入れるもの。

それが彼の中の『痛み』だった。

痛みを感じることで、彼は自分の感覚が正常である事を実感できた。自分の体から流れる血を見ることで、彼は自分が生きている事を証明できた。

傷を見ることで、彼は自分が五体満足であることを確認できた。

それが彼の過負荷^{こふか}の根底にある、いわば土台となっている部分である。

そして彼は、他人の痛みをも求め、自分の痛みを分け与えるようになった。

四時間目の授業も終わり、昼休み。
IS学園にも勿論昼休みはある。生徒達は各々の時間を自由に過ごしていた。

「オルコット」

セシリア・オルコットも昼食を取るために教室を出たところを、織斑千冬に呼び止められた。

「あら織斑先生。どうかなさいましたか？」
「これにサインしろ」

千冬はセシリアに一枚の書類を手渡した。

「？ これは？」
「第三アリーナの使用許可証だ」
「第三アリーナ……？」
「全く、何も考えず決闘だと言いおって……。場所や時間を手配するこちらの身にもなれ」
「っ！！ 申し訳ありません！ 先生のお手を煩わせてしまい……放課後までには提出いたします！」

その書類の意味が分かったのか、セシリアは顔を青くして頭を下げる。

さすがに『世界最強のIS操縦者』と呼ばれる織斑千冬相手に傲慢な態度をとるほど、セシリア・オルコットは愚かではない。そんなセシリアを見て、千冬は少しだけ顔を歪ませる。

「オルコット」

「……？ はい、なんでしょう？」

「悪いことは言わない。
—夏^{あいつ}との決闘なんてやめろ」

千冬のその一言に、セシリアは隠そうともせず不快な表情を見せる。

「それは、この私があつた男に負けるとでもおっしゃりたいのですか？」

「……そうじゃない、お前と一夏^{あいつ}が試合したなら、十回中十回お前が勝つだろう」

「なら何故っ！ 私がそんな相手にわざわざ決闘を取り下げなければいけないのですか！？ それでは私が負けを認めるようではありませんか！」

激昂するセシリアを見て、千冬は悲しそうに首を横に振る。

「オルコット、私が言ってるのは、『勝つ』とか『負ける』とか、そんな話じゃないんだ」

「……………どういふことですか？」

「お前は、一夏^{あいつ}への勝利と引き替えに、自分の中の何かしらを失うと言ってるんだ」

そう言った織斑千冬の顔は、^{ブリュヒリンデ}世界最強とは思えないほど、弱々しくて今にも泣き出しそうな顔だった。

「……………?」

セシリア・オルコットはその言葉の真意が掴めず、眉根に皺を寄せ
る。

「…………いや、いい。今は忘れてくれ」

千冬は頭を軽く振ると、自ら話を切り上げた。

表情は既に、IS学園教師としての凜としたものに戻っていた。

「では、書類の提出、忘れないようにな」

そう言って、織斑千冬はその場を後にした。

一年一組は、昼休みだと言うのに、なにやら妙な空気になっていた。それはと言うと、四時間目の授業にあったいざこざのせいで、プレッシャーとも言える威圧感を放っている篠ノ之箒が原因である。そのせいか、なにやら教室に残っている面子はなにやら気まずそうである。

それを見かねたのはIS学園唯一の男子、織斑一夏である。

別に彼は無関心を決め込んでもいいのだが、それはなんだか後味が悪いし、何よりあんな周りの心臓に悪そうな雰囲気垂れ流している幼なじみはいただけない。

そう考えた彼は、『俺に任せろー』的な表情で箒の席まで行き、声を掛ける。

「箒ちゃん」

「……………」

「一緒にご飯食べに行かない？」

「……………」

「ほら、僕今日学校遅れて来たでしょ？ 食堂の場所とか分からないから、よかったら案内ついでにさ」

「……………」

彼は箒に何とも無しに話しかけるが、当の彼女は頼杖をついて窓の外を眺めたまま、全く返事を返さない。

「お、織斑君、ごめんね？」

彼に小声で話しかけてきたのは、先程のいざこざで箒と束博士との関係で騒ぎ立てた女子生徒の内の三人である。

「本当だったら、私たちが篠ノ之さんと話して和解しなきゃいけないんだけど……………」

「今の篠ノ之さん……………ちょっと怖くて……………」

「うう……………ごめんねえ、おりむー」

「……………『おりむー』ってなんだろう……………？」

最後の女子生徒に変なあだ名を付けられた事に心の中でツッコみつつも、彼は三人に向かって苦笑する。

「大丈夫大丈夫、箒ちゃん、そういう年頃なんだよ」

そう言われた三人、周りで聞き耳を立てていた他のクラスメイト、そして話が聞こえていた箒は揃って首をかしげる。

「ほら、今箒ちゃん十五歳でしょ？」

ますます意味が分からない。
彼女らの表情はそんなものだった。

「あれ位の年頃特有の独特な感性だよ。『一人で窓の外見てる私力ツケエ……』みたいなね」

その言葉を聞いた箒はガンッ、と机に頭をぶつける。

「ちよつ、ちよつと待て一夏！ 何だその失礼極まりない発言は！ 私は断じてそんな恥ずかしい事は………おいちよつと待つてくれ、何で皆納得したような表情をしているんだ？」

「さ、厨二病をこじらせちゃってる箒ちゃんはおいて、ご飯食べに行こうか。僕食堂の場所分らないから教えてくれない？」

顔を真っ赤にして弁明する箒をあえて無視し、一夏は他のクラスメ

イトと食堂へ向かう。

「なっ、ちょっと待て、ホントに待て、私も行くぞ一夏！　そして撤回だ！　前言の撤回を要求するぞ！　おい、聞こえてるだろう！　無視するな一夏っ！」

篠ノ之箒は、顔を真っ赤にしたまま、慌ててその後を追った。

「悪い」とは言わない」(後書き)

——「……」夏……」——

「全部ひつくるめて」

「『ねえ一夏ちゃん』『君は今の世の中をどう思ってるんだい？』『どうしたの球磨川君、藪から棒に』」

織斑一夏に球磨川と呼ばれた学生服の少年は、無感動な瞳を細めながら屈託のない口調で続ける。

「『いやさあ、ISなんて物が出てきて十数年経つじやない？』『ただでさえ過負荷はくたには不条理と理不尽が付きまとうのに女尊男卑なんて参っちゃうよ全く』『その点だと怒江ちゃんと飛沫ちゃんが羨ましいよ』」

「そんな心にもないこと言って。不条理と理不尽は過負荷はくたの日常じゃないか。今さら女尊男卑になったって何も変わらないよ」

「『まあそれもそうなんだけどね』」

何とも無しに、二人の間から笑いが起こる。

「『で、そんな世界を君はどう思ってるのかなって話だよ、一夏ちゃん』」

「そう言う君はどうなのさ、球磨川君」

「『僕かい？』『僕の世界は今も昔も変わらないさ』『壊したくなるほど妬ましくて』『螺子伏せたくなるほど憎らしいよ』」

「生徒会長とは思えない発言だね。よくそんなので当選できたね。支持率0で当選したのも凄いけどさ」

「『一夏ちゃんも箱舟中学に來ればいいのに』『今からでも転入してくれば？』」

「いいよ、お金掛かるし家からちよつと遠いし。姉さんに迷惑かつちやうしね」

「『ふうん、残念』『さ、僕は話したよ』『次は君の番だよ一夏ちゃん』」

「んーそうだねえ……」

一夏は少し考える素振りをし、答える。

「大まかな所は球磨川君と一緒にだよ。クラスメイトは嫌いだし、エリートは妬ましいし、僕と姉さんを捨てた両親は殺してやりたいくらい憎い」

けどね、と彼は続ける。

「そついつの全部ひつくるめて、僕はこの世界を愛しているよ」

暴力を振るうクラスメイト

自身を見下すエリート

痛いぐらいの愛情と同情を送る実姉

実姉と自分を捨てた両親

それを見過ごす世界

彼はそれら全てを受け入れ、抱きしめ、愛しているのだ。

自分に理不尽を振りかざす相手を、そして理不尽そのものすらも、彼は溺愛している。

だから彼は、常に傍げに笑う。

決して憎しみや妬みを表に出すことはない。

彼は自分の中で全て平等に、均等に、愛しているのだから。

「『相変わらずの被虐主義だねえ』^{マイナス} 『僕は少しだけ君がそっちの道に走らないか心配になるよ』」

「また心にも無いことを」

そう言って二人はまた、何とも無しに笑った。

これは、織斑一夏が中学一年の頃の、大嘘憑き^{マイナス}とのほんのワンシーン。

昼休み。

無事雰囲気の和らいだ（ただし、不名誉なレッテルを貼られるの
引き替えに、だ）篠ノ之箒を加え、織斑一夏と彼が教室で声を掛け
たクラスメイト達は食堂に移動していた。

食堂に入った一夏は思わず感嘆の声を漏らした。

「（流石ISS学園……………まるでレストランじゃないか……………
…）」

生徒達に掛かるストレスを最小限にするためか、食事スペースも大きく取られ、メニューも各国の家庭的な料理からそれなりに高価な物まで様々だ。

彼らは固まつた席を確保すると、各々料理を注文するために食券を買いに行った。

「へえ、箒ちゃんのソレ、美味しそうだね」

篠ノ之箒が席に戻ってくると、織斑一夏は既に料理を受け取り終えたのか既に昼食を食べ始めていた。

箒に少し遅れて彼が誘ったクラスメイト達も戻ってくる。

が、篠ノ之箒は一夏の昼食の乗っているトレイを見て絶句した。

「い、一夏……………」

「ん？ どうしたんだい箒ちゃん」

「な……なんだソレは？」

「何って、僕のお昼ご飯」

「……………」

箒は言葉が出なかった。

席に着いた三人も、そろって驚いている。

彼のトレイの上にあるのは、フルーツの入ったパウンドケーキ一切れと、紅茶一杯。

それだけだった。

篠ノ之箒は焼き魚のついた定食、他の三人もパスタやサンドイッチ、リゾットとそれなりに量のあるもの。

同じ歳の女子がそれだけ食べるのに対し、一夏の食事量は余りに少なかった。

「そ、それだけで足りるのか？」

「ん？ ああ、大丈夫だよ。ほら、僕って運動しないからさ、あんまり食べると太っちゃうんだ。まあ、これから嫌でも運動することになるから、多分徐々に増えてくと思うけど」

あはは、と彼は苦笑気味に笑う。

確かに彼の体は平均的な男子高校生と比べてみても細身の部類に入る。

まあそんな男子高校生がいても不思議じゃないだろう。
三人はふうん、と言って納得した。

「運動してない……………だど？」

が、どうにも納得できないと言うか、別の所に引っかかったのは篠ノ之箒。

「一夏、貴様剣道はどうした？」

「？ やめたけど？ 箒ちゃんが引っ越してすぐ」

「やめた？ やめただと！？ あれだけ剣道に打ち込んでいたではないか！？ 何故そんなにあっさりやめたのだ！？」

箒はここが食堂だということを忘れて激昂する。

必然、食堂に居る生徒の視線が一気に箒へと集まる。

「なんでって……………そりゃ箒ちゃんがいないからだけど」

「え？」

思いがけない一言に、箒の勢いが止まる。

「箒ちゃんがないのに、剣道続ける意味なんてなかったからね」

もうコレ完全に告白じゃね？

食堂にいた生徒達の思いはこの時完全にシンクロした。

当然、その言葉を聞いた篤は顔を真っ赤にする（忙しいことこの上ない）。

思いを寄せている相手から告白まがいな事を言われれば、この反応は当然と言える。」

だが、そこで篤の脳裏にフラッシュバックするのは、二人が小学生だったころの記憶。

床に倒れ伏す織斑一夏

それを取り囲む篤を含めたクラスメイト

篤は竹刀を起きあがろうとしていた一夏に叩きつける

他のクラスメイト達もそろって一夏に理不^{ほつりよく}尽を振るう

だがどれだけ理不^{ばつじやく}尽を振るわれようと

それでも一夏は儚げな笑みを崩さない

優位に立っているのは自分たちのはずなのに

織斑一夏への恐怖がどうしても拭えない

その恐怖が 嫌悪が 緊張となって表情に表れる

織斑一夏はいつも通り儚げな笑みを浮かべながらユラリと幽鬼のよ
うに立ち上がる

そして――

「篠ノ之さん？」

その声で、篠ノ之箒は現実に引き戻された。

「どうしたの？ いきなり怒ったと思ったたらぼうつとして……………」
「なんだか顔色も悪いよ？」

どうやら隣に座ったクラスメイトが、ぼうつとしている箒に声を掛けてくれたようだ。

「大丈夫かい箒ちゃん？ もしかして体調悪いのかい？ 僕が無理に誘ったせいで無理させちゃったかな？」

一夏も心配した様子で箒の顔をのぞき込む。
眼帯をつけてるためか、遠近感が掴めないようだ。

——違う

——私は

——お前に心配される資格なんて無い

——私は……………

「あ、あぁいや、すまない。大丈夫だ」

箒は眉間を押さえながら先程の記憶を振り払うように頭を軽く振りながら席に座る。

「一夏」

「ん？」

「放課後、剣道部の道場に来い」

「何でだい？ まさかISの特訓とか言い出すつもりかい？ 言っておくけどISは基本空中戦メインだぜ？ ISの特訓で剣道持ち出すなんて、言っちゃあ何だけどナンセンスだぜ？」

「基礎体力の無いお前では話にならないだろう」

「確かにね」

何が面白いのか、クスクスと一夏は相も変わらず儂^{わら}げに微笑う。

「けど、いいよ。僕が負けることはもはや決定事項だぜ？ 無駄な努力はしない主義なんだ、僕は」

「……………っ！」

「けどま、理論の方面で支えてくれよ、箒ちゃん。僕は授業さっぱりだったから」

「……………！ ああ」

箒は彼のその申し出を、快く引き受けた。

思いを寄せた相手の心に、深い傷を与えた彼女の過去は、誰にも覆

せない。

だから彼女は、篠ノ之箒は、決めた。

これからの出来うる限り、彼の力になると。

それが自分にできる精一杯の償いと謝罪だと思ったから。

例えそれがただの自己満足だと分かっているても。

だが、彼女は知らない。

彼女が過去に一夏に与えたものは、心の傷でも、トラウマでも無いことを。

そして

過^{マイナス}負荷と関わることが、どれだけ己の心を決める事になるかを。

「全部ひっくるめて」(後書き)

——「ちょ、織斑君、待つて！ 待つてくださーい！」——

「ちょっと黙っててくださいよ」

「ふんふんふんふんふん」

織斑一夏は足りない背丈を目一杯の背伸びで補いながら、キッチンに立っていた。

鼻歌を歌いながら、小学生とは思えない慣れた手つきで包丁を握り、食材を刻む。

先程彼の姉、織斑千冬から、今日は家に帰れると連絡があった。なかなか家に帰ってこない姉に久々に会えると言うことで、今日の夕食は少し豪華にしよう、と彼は小学校から帰って来るなりこうして夕食の下ごしらえにいそしんでいる。

「姉ちゃんは、何時帰ってくるのかな」

彼は姉がただいまと言う声を想像して嬉しそうに笑った。

織斑姉弟には、両親がいない。

正確には、両親が『いた』と言うのが正確だろう。

一夏の両親は彼が小学校に上がる頃、二人を捨てて姿を消した。

だから彼は両親の愛を知らない。

もともと彼の両親は一夏に過激な虐待を加えていた。

両親からは愛情よりも暴力を先に貰ったのだから、父親の厳しさを

ど、母親の温かさなど、知るはずもない。

彼が知ってるのは、姉からの狂おしい程の愛情と同情だった。
千冬はなかなか家に帰ってこない。

だから会ったたびに彼女の視線からは姉弟愛とか倫理とか、そういう物を簡単に飛び越えそうな十二かが滲み出していた。
そして一夏はその愛情が嫌いじゃなかった。

彼はそんな最愛の姉の為に、タンタンタンとリズムカルに食材を刻む。
そのリズムに合わせて鼻歌も大きくなる。

と

ザクン、と食材を斬る音とはどこか違う音が彼の耳に入った。
見ると彼の人差し指からは血が流れている。

どうやら指を切ってしまったようだ。
ポタ、ポタ、と彼の指と包丁から滴った血が、白いまな板の上に赤いシミを作る。

「ふんふんふん、ふんふんふん」

が彼の表情に苦悶はなく、あるのは先程までと変わらない笑顔と鼻歌である。

彼は自分の指から滴る血を恍惚とした表情で見っていた。
ペロリ、と舌先で人差し指の傷口を舐めると、口いっぱい生臭い鉄の味が広がった。

「ふふんふふん」

そうして、また彼は鼻歌を歌いながら、料理を再開した。
もうすぐ、姉が帰ってくるだろう。

そんな期待をしながら、タン、と食材を刻んだ。

キンコーンカーンコーン、と無機質なチャイムが授業の終了を告げる。

「では、今日の授業はこれまで。明日の連絡は特にはない。以上、解散」

担任教師の織斑千冬のその言葉で、生徒達の体から力がほうっと抜ける。

今この瞬間をもって、IS学園一年生の入学初日が終わった。特に一年一組の担任はあの『織斑千冬』だ。

それはそれはプレッシャーがとんでもないことになっていただろう。

「ああ、そうだ。織斑だけは連絡事項があるから残るように」

千冬は思い出したように、実弟である織斑一夏に呼びかける。最後の授業が終わって一分も経っていない。

千冬はまだ一夏が教室に残っているものだと思っていた。

「……………織斑？」

だが、数秒待っても彼から返事が返ってこない。
千冬は真正面の一夏の席に目を向ける。

そこに、織斑一夏の姿はない。

「……………あの一瞬で荷物まとめて教室から出て行ったのか……………」

千冬はこめかみを押さえながら呟く。
なんだその無駄なワザは。
思わず心の中で呆れかえった。

「すつ、すぐに探してきますー!!」

副担任の山田真耶が、駆け足で教室から飛び出していった。

「ちょ、織斑君、待って！ 待ってくださいーい！」

真耶が一夏に追いついた時には、既に彼はIS学園を出ようとしていた所だった。

彼は慌てて駆け寄ってきた真耶に気づき、尋ねる。

「どうしました先生。そんなに急いで」

「す、すいません。織斑君の、寮の部屋が、決まりました」

切れ切れに言ったその言葉に、一夏はキョトンとする。

「寮？ 僕はしばらくは自宅から通うはずでは？」

「す、すいません。政府からの通告で、織斑君に学生寮を用意する
ように、と」

「そうですか。わかりました」

彼は笑顔で真耶にそう言つと、

IS学園の出口へ向かった。

「ちょ、ちょっと待って下さいい！」

普通に帰ろうとする一夏を真耶は慌てて止める。

「え？ なんですか先生？」

「何で帰ろうとしてるんですか！？ 駄目ですよ政府からの通達なんです！！」

「でも僕家に荷物取りに行かないと」

「荷物は織斑先生が手配したそうです！！」

「でも枕が変わると眠れないんですよ、僕」

「が、我慢してくれませんか！？」

「ベットの下の「ピー」な本がちょっと心配で」

「なっ、え、えっちいのは駄目ですよ！！」

「もう先生——」

——「ちょっと黙っててくださいよ」

一夏はその男子高校生とは思えない程卓越した家事スキル故、偶然持ち合わせていた肉斬り包丁で、山田真耶に斬りかかった。

「え？」

勿論、生徒からいきなり包丁で斬りかかられるシチュエーションなど想像してなかった彼女は、迫り来る包丁を呆然と見ていた。

だがそれを、織斑千冬が真耶と包丁の間に差し込んだ出席簿で受け止めた。

ペタン、と腰が抜けたのか尻餅をつく真耶。

「……学校に危険物を持ち込むとは感心しないな、織斑」

千冬は鋭い眼光で一夏を睨み付ける。

「やだなあ僕は先生を怪我させるつもりは無かったんですよ？でも僕が普段から愛用してる故いつも持ち歩いてる包丁が血を求めちゃってですね？」

「中学生センスな妄想は結構だが、その包丁は没収だ」
「ちえー」

彼は意外なほどあっさり包丁を手放す。

「ごめんなさい先生。もう二度としませんから」
「は、は、はい……」

彼はいつもの儚げな笑みで真耶に話しかける。

「ところで先生。僕の寮の部屋ですが、誰と相部屋ですか？」
「ばかもの。お前は一人部屋だ」
「あはは、そうですね。僕を誰かと相部屋にするなんて、それこそ何があるか分からないですもんね」
「……………」

彼は千冬から部屋の鍵を受け取ると、鼻歌を歌いながら寮へと向かった。
残されたのは険しい顔をする千冬と、未だに腰が抜けカタカタと小刻みに震える真耶だけだった。

「ちょっと黙っててくださいよ」(後書き)

——「それでも、だ」——

「僕に負けちゃうよ?。」

「あ、姉さんお帰りなさい」

多くの学校が夏休みに入り、しばらくした頃。

織斑千冬が久しぶりに自宅に帰ってきたとき、彼、織斑一夏はそう言って仕事終わりの姉を玄関で迎えた。

一夏の格好を見ると、私服にエプロンといった格好である。どうやら先程までキッチンに立っていたのだろう。

「ごめん姉さん。今、友達が泊まりに来てるんだ。姉さんが帰ってくるって分かってたら断ってたんだけど、ごめんね」

「ん?。」

一夏のその言葉に千冬が目線を下げると、確かに一夏の靴以外にもう二足靴がある。

「いや、気にしないでいいぞ一夏。連絡をしなかったのは私の方だからな」

「本当?　なんかごめんね姉さん」

そう言って彼はパタパタとリビングへ戻っていった。
件の友人に、千冬が返ってきた旨を伝えにいったのだろう。

ふと、彼女は弟の友人がどんな人物なのか気になった。
思えば彼女は、一夏が友達と遊んでいるのを見たことがなかった。
殆ど家に帰らず仕事をしているのだから当然と言えば当然だが、彼
から自分の友人の話を聞いたことがなかったのだ。

千冬は靴を脱いで玄関に上がると、リビングのドアを空けた。

そこに居たのは、二人の少年だった。

一人は夏休みだというのに学生服を着込んでいる少年、
もう一人は何故か燕尾服をまるで私服のように着こなしている、何
処か執事を思い出させる格好をした少年。

「ああ、姉さん。紹介するね。僕の友達の球磨川君と蝶ヶ崎くんだ
よ」

「『あ』『もしかして一夏ちゃんがいつも言ってるお姉さん?』」

『わー美人だねー』」

「……………どうも。お邪魔してます」

キッチンから出てきた一夏は姉に自分の友人を嬉しそうに紹介する。
球磨川と呼ばれた少年は屈託のない口調で千冬を見つめ、蝶ヶ崎と
呼ばれた少年は特に興味もないのか静かに挨拶する。

そんな二人を見て、千冬は彼らから目を離せなかった。

心の底から湧き上がる嫌悪感。

彼らと目を合わせるだけで鳥肌が立ち、言葉を交わすだけで自分の中をジワジワ毒されていく様な、そんな感覚が千冬を襲う。
だが、彼女が目を離せなかった理由はソレではない。

彼女は驚愕していたのだ。

目の前の二人の少年が、

余りにも一夏と、『同じ』だったから。

「『やっぱり志布志ちゃんと江迎ちゃんも誘った方が良かったんじゃない？』『僕らが彼女達を仲間外れにしたとか思われたら何されるかわからないよ？』」

「いや球磨川さん、さすがにこの年代の男女が揃って外泊するのは流石に……」

「『あ』『蝶ヶ崎君もしかしてちよつとえつちい事期待してた？』」

「わー流石思春期男子！』」

「ちよ、ちよつと球磨川さん！？ 私は断じてそんな事は」

「んーじゃあ今から呼ぶ？ 僕二人の連絡先知らないから球磨川君電話してくれない？」

「『おっけー』」

「あ、姉さん。もう二人友達泊まることになりそう何だけど、大丈夫？ やっぱり女の子はマズい？」

「何でお二人とも呼ぶ前提で話を進めてるんですか！？」

一見何の変哲もない、同年代同士の会話。
だが、それを目の当たりにした千冬は、気付いた。

一夏の友人達の、その異質さに。

そして、弟の異常さにも。

彼女は恐怖の感情からか、リビングの扉を閉め、そのまま家を飛び出して自身の勤め先であるIS学園へと向かった。

弟への心のそこからの嫌悪感を、恐怖を、気のせいだと思いこんで。

「『……一夏ちゃん、お姉さんどっか行っちゃったよ?』」

「わたしたち過負荷にとつては、いつもの事じゃないですか」

「『で、どうかあのお姉さん』マイナスもしかして一夏ちゃんが過負荷だつて今気付いたのかな?』」

「江迎ちゃん呼ぶんだよねあ………テレビとか冷蔵庫とか、せめて家電類には触らないように言っとかないと………」

織斑一夏、中学一年の出来事である。

「…………あれー、ここ僕の部屋だよなあ……………」

一夏は、先程姉であり担任である千冬から手渡されたキーの番号をみる。

そして視線を目の前のドアに移す。
確かにキーに書かれている番号と同じである。

では何故、扉には『寮長室』と書かれたプレートが掲げられているのだろう。

「何をドアの前で突っ立っている。さっさと入れ」

そこに、一夏にこの部屋のキーを手渡した張本人である千冬が表れる。

「えっと、織斑先生？　ここ僕の部屋ですよね？」

「そうだが。何かあったか？」

「いや、扉にガツツリ『寮長室』って書いてあるんですけど」

「安心しろ、私が寮長だ」

千冬は素知らぬ顔で一夏に言い放つ。

「でもさっき僕は一人部屋って言ってませんでした？」

「そうだ。『生徒は』お前一人だ。それに私は寝るとき以外は部屋こゝに戻らないから実質一人部屋だ」

「くうっ、おのれっ！　横暴だ！　職権乱用だ！」

「さっきはああ言ったが、お前を一人にすると、何があるか分かったもんじゃないからな」

一夏の涙を流しながらの（嘔泣き）熱弁を右から左へと聞き流し、千冬はその場を去った。

「……仕方ない。幼なじみって理由で筭ちゃんと同室にされなかっただけでしょうか……………」

そう呟きながら、彼は今日から自室となるドアをゆっくり開いて――

——閉めた。

そうして彼は再び扉の前でこめかみを押さえる。

おかしい。

今、この扉の向こうに魔窟が広がってた気がする。

一夏は今の光景が自分の見間違いであることを信じて、もう一度扉を開いて——

——やっぱり閉めた。

どう見ても魔窟だった。

彼は今この瞬間まで忘れていたのだ。

姉の家事スキルが壊滅的であることを。

「……………今日は寝られないかなあ……………」

いくら彼が過^{マイナス}負荷と言えど、こんな劣悪な環境では体を壊してしまうことは目に見えていた。

彼はやれやれと溜め息を吐きながら、ゆっくりと魔窟に足を踏み入れた。

そうして迎えた、一週間後。

一夏と筈は、第三アリーナのピットにいた。

彼はこの一週間、昼間はIS学園で授業を受け、放課後などの空いてる時間に筈や先日食事したメンバーに授業ではカバーしきれないところを教わっていた。

副担任である山田真耶にも一夏は質問しに言ったのだが、最初は話しかけた瞬間怯えて会話にならなかったが、今では何とか恐る恐ると言った感じで一応会話はできる。

危うく殺されかけた相手と普通に日常会話をしろ、というのが無茶な注文なのではあるが。

「んー、このISスーツ？　っていうの？　これやつぱり着ないと駄目かい筈ちゃん？　制服でやった方が様になると思っただけだ」
「伝達率の効率から考えて、IS^{それ}スーツの着用は必須だ。それに格好を気にする必要などないだろう」

「いやー過^{ほく}負荷の信条でね、『負けるときは格好良く、そして態度

悪く』がもつとーだからねえ。このピチピチで羞恥プレイな格好は少々いただけないのさ」

「そんな事を気にする暇があったら少しでも努力して泥臭く勝とうとしろ、ばかもの」

箒は一夏の軽口を冷たく突き放す。

「ところでさあ、何で僕の専用機まだ来てないのさ？ あと五分もしないうちにオルコットさんとの試合始まっちゃうんだけど。もしかして束ちゃん僕の機体のこと忘れてない？」

「知らん」

姉の名を出されて少し不機嫌になった箒は、むっとしながら一夏に即答する。

現在試合五分前。

一夏の専用機は、未だに届かない。

本来ならば試合までの一週間でISの操縦に慣れておくべきなのだが、学校に配備されている量産機は予約が一杯で使用できず、それ以前に一夏本人がこれを拒否。

せめて試合前に少しでも慣らしておこうと、箒に半ば引きずられる形で三十分前にピットに来ていた一夏だが、いざ来てみるとまだ届いていないという始末。

一夏はこの事態にやれやれと肩を竦め苦笑する。

「いやー困ったねえ箒ちゃん。このままだと僕はオルコットさんに不戦敗しちゃうよ」

「何でお前は言葉とは裏腹に嬉しそうなんだ」

「オルコットさんも誘いにノリで受けちゃったけど、『決闘』だよ箒ちゃん？ 『一対一で正々堂々』に定評のある『決闘』だぜ？ そんなの面倒臭くて虫唾が走るよ」

儂げな笑顔のまま言った一夏のその言葉を聞いた箒は眉根を寄せる。

「お前は私と剣道をしていた時もそんなことを思っていたのか？」

「思ってたさ。前にも言ったけど、箒ちゃんと一緒だったから俺は剣道やってたんだぜ？」

その言葉に箒はうつ、と顔を少し赤くした。

そして、その時の光景が箒の脳裏にフラッシュバックし、顔を曇らせる。

篠ノ之箒の記憶では確かに、織斑一夏は本当に楽しそうに、竹刀を振るっていた。

試合で勝てば喜び負ければ悔しがる、本当に普通の、剣道に打ち込む少年だった。

分からなかった。

彼が何故、ここまで腐ったのか。

彼が何故、ここまで墜ちたのか。

彼が何故、ここまで屈折したのか。

その原因の一端であるはずの彼女でも、今の一夏は分からなかった。

「織斑君！！ 織斑くん！！」

そんな声と共に、山田真耶が一夏の元へ駆け寄ってきた。

「先生、そんなに叫ばなくても聞こえますよ。どうしました？」

もしかして僕の専用機運搬途中で事故にでも遭ってテロリストにでも奪われました？」

「そんなぞつとするようなこと言わないで下さい！ 違いますよ！
今さっき、織斑君の専用機が届きました！」

「えー」

「な、何でそんな嫌そうな顔するんですか！？」

一夏の反応にツツコミを入れる真耶を無視し、彼は自分の専用機の元へ向かう。

「これ……………ですか？」

「そうです！ これが織斑君の専用機『白式』です！」

そこには、『白』があった。

その圧倒的な存在感は歴戦の騎士を想像させるほど、その機体には存在感があった。

「織斑、時間がない。フォーマットとフィッティングは実戦でやれ」

と、機体の陰にいたのか、いきなり現れた千冬が一夏に言う。
本来なら試合前に済ませるべきなのだが、如何せん機体が届いたのがついさっきである。

「『ふぉーまつと』？ 『ふいつていんぐ』？ ごめん姉さん日本語でお願い」

「日本語だ馬鹿者」

はあ、とそんな一夏の言葉を聞いて、千冬は溜め息をつく。

「操縦席に座って力を抜け。普通にしていればいい」
「はい」

そついうと彼は操縦席に座る。
すると彼の体を、まるで白式と同調するシンクロような感覚を襲う。

自分の中に何かが入り込み、溶け合っていくような、不快であり同時に心地いいような、矛盾を孕んだ感覚が一夏の体を駆け巡る。

「織斑、気分はどうだ？」

千冬は少しだけ心配そうに、一夏の顔を見る。

そして、一夏の表情を見た彼女は、顔を強張らせる。

そこには、いつもの儚げな笑みではなく、どこか狂気じみた微笑みを浮かべる一夏がいた。

「悪くないよ、姉さん」

千冬の問いに、彼は短く答える。

「篝ちゃん」

彼は、顔だけ篝の方に向けて、言う。

「行ってくるね」

そういつて、彼は上空へと飛び上がった。

「あら、逃げずに来ましたのね」

「クラスのみんなが観客ギャラリとしていているからね。僕と君だけだったら迷わずばつくれたんだけど」

「へ、変な所で紳士的ですわね……」

ヒクヒク、とセシリアは口の端を引きつらせる。

彼女はコホンと一つ咳払いをして仕切り直す。

「最後のチャンスをあげますわ」

「……………チャンス……………」

「このまま闘つても貴方の無様な敗北は目に見えてますわ。今降参すると言つなら、私の執事にでもして差しあげますわよ？」

明らかに見下したように、セシリアは一夏にそう言った。

彼女のその言葉に、彼は少し悩むような仕草をして苦笑する。

「その提案はとても魅力的なんだけどね、オルコットさん。『週間少年ジャンプ』的な信念で言わせてもらうと、『負けると分かっているもやらないきやならない時』なんだよね。だからその提案には、乗れないな」

「そう……………でしたら」

そう言つと彼女は自身の専用機『ブルー・ティアーズ』の装備であるレーザーライフル『スターライトmk?』の安全装置を外す。

そして、

「お別れですわねっ！」

彼女はライフルの引き金を引いた。

銃口から出た一条の光弾は、一直線に一夏の元へ。

そしてそれは、全く動かない一夏の右肩を貫いた。

ISの『絶対防御』が発動したものの、衝撃は確実に操縦者を襲う。

「っ！？」

その時、彼女は自分の体に、僅かな違和感を感じた。

先程光弾が一夏を貫いた場所と同じ、右肩に。

「だめだなあ、オルコットさん」

着弾の衝撃で降下した一夏が、先程の不意打ちまがいの射撃の影響など全く感じさせない調子で話しかける。

「君は全く分かってないよ、過^{ほく}負荷の扱い方を。そんなんじゃ君――

――僕に負けちゃうよ?。」

彼のその言葉を聞き終わらない内に、セシリアはもう一発彼に向かって射撃する。

しかし一夏もそれをギリギリの所でかわす。

セシリアはその隙にさらに上空へ上昇し、ライフルを構える。

「さあ、踊りなさい! わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲^{ワルツ}で!」

「悪いけど、現代若者の間でダンスと言ったら、ヒップホップだぜ、オルコットさん?」

決闘の引き金が、引かれた。

「僕に負けちゃうよ?」(後書き)

——「それじゃあ駄目だよ」——

「災厄だ」

「篝ちゃんはさ、自分が生きてる理由とか、考えたことある？」
「は？」

セシリア・オルコットとの決闘前、ピットにいた織斑一夏と篠ノ之
篝はそんなことを話していた。

「なんだそれは？」
「ああごめん、言い方が悪かったね。自分が生涯何をするために生
きてるかとか、一生かけての目標とか、そういうのある？　ってこ
と」

一夏のその質問に、篝は少し考える。

「私は……どうだろうか。姉のせいで一つの場所に落ち着いて暮ら
すなんて事もなかったし、考えたこともなかったな」
「そっか。まあみんなそうなのかな」

篝のその答えを予想していたのか、一夏は苦笑気味にコメントする。

「……………そういうお前は、何かあるのか？」

箒は純粹な興味から、一夏に同じ質問を返した。

彼女は、織斑一夏にどこか負い目を感じている節がある。

彼に過度なイジメを、暴力を加えてしまった彼女の過去が、過^{いま}負荷の一夏を作ってしまったと思いこんでいる。

勿論、それも彼が過^{マイナス}負荷となった原因の一つではあるが、全てではない。

むしろ、彼女が一夏にしたことは彼の中では何て事無い日常なのだ。一夏の中ではそれこそ、砂漠の砂の一粒に過ぎないのだが、箒がソレを知るはずもない。

だから彼女は、自分の持てる全てで一夏の力になることを誓った。

彼は世界で唯一の男性操縦者だ。

これから、一人じゃどうにもならない事態が彼を襲うかもしれない。そんなときに、少しでも彼の力になりたいと、彼女は一夏とこの学園で再会して思った。

それが例え自分の中での自己満足だとしても、それが自分にできる罪滅ぼしだと信じて。

だから箒は知りたかった。

彼が、織斑一夏という人間が、何を思い、何のために生きているのかを。

「僕？ うーん……………そうだねえ……………」

少しだけ、彼は考えるような素振りを見せる。

言つか言わないかを考えている、と言つよりどう言葉にするかを考えているようだった。

「強いて言つなら……僕が『今生きてること』を確かめたいんだ」

彼のその言葉に、箒は眉根を寄せる。

訳が分からない、とでも言いたげな彼女の表情を見た一夏はいつもの儚げな笑みを浮かべたまま続ける。

「僕ってさ、自分の中で『今生きてる』って感じがしないんだよね。なんかこう、『生きてるけど死んでる』みたいな、『死んでるけど生きてる』っていうかさ、気付いたときから、ずっと僕はそんな感じなんだ」

そう言いながらも儚げな笑みは崩さぬまま、一夏は続ける。

「でもね、そんな僕でもたまに生きてることを実感するときはあるんだ」

——痛みがあるときだよ。

「よっほっ、はっ、これ結構、疲れる、ね」

一年一組のクラス代表の座をかけた織斑一夏とセシリア・オルコットの決闘が始まって十分。

蓋を開けてみれば、それは『防戦一方』と言う言葉が驚くほどキレイにあてはまる物だった。

勿論、どちらが防戦一方となっているかは言うまでもなく、織斑一夏である。

一夏は、セシリア・オルコットのISの装備であるビット『ブルー・ティアーズ』とレーザーライフルによる銃撃の雨と表現すべき上空からの連続射撃をなんとかギリギリで避け続けている。

しかし、方やコレが三度目のIS搭乗となる少年。

方やISの合計操縦時間100時間越えの国家代表候補生。実力の差は明確である。

序盤は上手く銃撃を避けていた一夏だったが、操縦の荒さからか慣れていないからか、次第に銃撃は彼の肩に、腕に、足に次々と命中し確実に彼のIS『白式』のシールドエネルギーを確実に削り取っていく。

「あつはは、これはヤバイかも、やっぱ運動、しとけば、よかつたかなっ」

「……………っ！」

だが、彼の表情には焦りも無ければ実力差に絶望しているような表情はない。

難易度の高いゲームをプレイしている、と言った方がピッタリな、どこか楽しげな表情をしている。

そんな彼を見て、セシリアはさらに銃撃の雨を降らせる。

むしろ表情だけを見れば、追いつめられているのは彼女の方だった。

ダメージは確実に与えているものの、なかなかどうしてしつこい一夏に苛立ちをつのらせる。

そうした焦りから彼女は弾幕とも言えるほどの銃撃を放つも焦りと苛立ちからか、どうしても雑になる。

そして、彼女を苛立たせてるものがもう一つ。

体に走る違和感である。

彼女の銃撃が、ビットから放たれたレーザーが、一夏の体を貫くた
びに、彼女の体を違和感が襲う。

右足を貫けば右足に違和感が。

左腕を貫けば左腕に違和感が。

もちろん彼の体を貫いたと言っても、ISの絶対防御が発動してい
るため、実際のダメージは無い。

が、それでも緩和しきれない衝撃は、確実に操縦者を襲う。

「……………なんだか、気味が悪いですわね……………」

彼女は心の中でそう呟くと、この決闘を早々と終わらせようと思っ
た。

「どつした山田君？」
「？」

一夏の飛び立ったピットの中。
篠ノ之箒、織斑千冬、山田真耶の三名は、一夏とセシリアの決闘を見守っていた。

その決闘を見ていた真耶の顔が少しだけ歪んだというか、違和感を覚えた様子なのを見て、千冬は声を掛けた。

「あ、いえ、きつと私の勘違い、なんだと思うんですけど」
「……………なんだ、言ってみろ」

そう聞き返す千冬の表情は、おおかた予想がついている、といったものだっただ。

千冬のその表情が見えていないのか、気付いていない様に真耶は続ける。

「その…………織斑君とセシリアさんの決闘が始まってから、こう、体に違和感というか、少しだけ痛いような感じがして……………」

やはり、と千冬は顔を少し歪ませる。

「山田君、それは勘違いじゃない。私も同じだ」
「え？」
「勿論、篠ノ之もそれは感じてるだろう？」
「……………」

千冬の問いに、篤は答えない。
それは肯定を語っているのか、それとも過去に経験があるのか。

「山田君や篠ノ之だけじゃない。少なくとも、『この決闘を会場で
見ている全員』は、その違和感を感じているさ」
「え？」

千冬のその発言に、山田真耶は疑問の表情を表す。

「『^{マイナス}過負荷』……………「^{アイツ}夏は、そう言ってたな」

ボソリと、千冬は何とも無しに小さく呟いた。

決闘が始まって、もうすぐ二十七分になろうとしていた。

二十七分。

搭乗時間、そして経験に圧倒的な差がある一夏が代表候補生相手にここまで粘れたのは、ある意味奇跡と言えよう。

だがそれも、終わりを迎えようとしていた。

其処にあるのは、シールドエネルギーの残量も残り僅かとなった一夏と、ここまで彼が触れることすら叶わず、上空から彼を見下ろしているセシリアの姿があった。

当然の結果。

他人から見たら、誰もがそう思うだろう。

一部の女性が見たなら、『男相手に何故そんなに時間がかかってい
る』と思うかもしれない。

そんな差違はあっても、誰しもこの状況を『当然の結果』と思うだ
ろう。

もちろん、当のセシリアもそう思っている。

しかしその思いに反して、彼女の胸中は未だに、言い表せない嫌な
感覚に襲われていた。

自分は圧倒的に優位なはずだ。

あと一発でも命中すれば、確実に自分は勝利することができる。

何を焦る必要がある、恐れる必要がある。

彼女はそう自分に言い聞かせ続けるも、嫌な感情は自分の中に居座
り続ける。

「駄目だなあオルコットさん。本当に分かってない。それじゃあ駄目だよ」

そんな彼女に、一夏は何とも無しに話しかける。

シールドエネルギーも僅かとなり、敗北の際にいるこの状況で、彼はいつも通りの儚げな笑みを浮かべ、まるで世間話でもするかのように。

「力で無理矢理過^{ほく}負荷を屈服させようだなんて考えちゃ駄目だよ、オルコットさん？ 過^{ほく}負荷は放っておけば勝手に折れるし、勝手に墜ちるし、勝手に負けるんだ。そんな相手にわざわざ手間をとって無理にねじ伏せようだなんて馬鹿げてるよ」

彼はやれやれと、苦笑混じりに話す。

その彼の仕草に、セシリアの中の嫌な感情はさらに大きくなる。

「そんなんじゃ僕を——この『広^{ペイント}酷塔』を、屈服させるなんてできないぜ？」

「『広酷塔』………?」
ペイントペイン
「ああ、一夏は自分でそう言っていた。本人曰く、『自分にある唯
アイツ
さいのう
一の過負荷』らしいがな」

千冬は、真耶の疑問の呟きにそう答えた。

「時に山田君。君は……『超能力』を信じるか？」

いきなり突拍子もない方向に話が飛んだ。
彼女が最初に思ったのはそんなことである。

「それは……私は半信半疑、って所ですかね？ テレビで見るのは何処か眉唾モノですし」

「……アイツ一夏は……その『超能力』が使える」

「ゑ？」

再び、突拍子もない方向に。

「え？ え？ 織斑君って超能力者なんですか？ え、それって……あ、もしかして」

「そう、一夏アイツが使える超能力……それが、本人曰く『広酷塔』ペイントペインというものらしい。……一夏アイツは超能力じゃなく『能力』スキルと言っているがな」

「ほえ、織斑君つてスゴイですね。どんな能力なんですか？
何か便利な事ができるとか？」

そう聞いた真耶だったが、実際千冬の言葉を内心疑っていた。そりゃ自分の弟は超能力者だ、なんて言葉、幼児の『俺の父さんパイロット』並に信憑性がない。だから彼女は、少し冗談ぽくして千冬に質問した。きっと千冬はいつもの裏のありそうな含み笑いで返してくるだろうと、そう思っていた。

だが彼女の予想に反して、千冬は顔を大きく歪めて、答えた。

「便利、か……………本当の意味で便利なら、まだ良かったがな……………」

一夏の能力である『スキル広酷塔』。

一夏らしいと言えば一夏らしく、そして過負荷らしい害悪にしかない能力である。スキル

『ペイントペイン広酷塔』。

それは、『外傷を周囲に居る人間に平等に分配する』スキル能力である。

例えば、一夏がカッターナイフで偶然指を切ってしまい、そしてその周囲に三人の人間がいたとする。

このとき、一夏の『ペイントペイン広酷塔』が発動する。

彼が負った切り傷は、周囲の人間に彼を加えた四人に平等に分配される。

よって彼は、本来負うはずだった傷の四分の一しか怪我は負わず、周囲にいた人間は彼の負うはずだった怪我の四分の一ずつを負うことになる。

勿論これは周囲にいる人間が増えれば、それだけ一人あたりに分配される傷の大きさは少なくなるし、逆に彼が怪我をしたときに周囲に一人しかいなかった場合一夏と二人で二分の一ずつ、文字通り『痛み分け』である。

彼とセシリアの決闘を見ていた人間が体を感じた違和感とは、一夏によって振り分けられた痛みである。

今回はセシリアの武装がレーザー兵器を主としていたため、彼を貫いた衝撃のみが分配されたのである。

この場合、決闘を見ていた人間の絶対数が多かったため、僅かな違和感にしか感じなかったのだが。

だが、この能力スキルの彼らしさはここからである。

この能力スキルは一夏の傷だけでなく、『他人が一夏の近くで負った傷』も、周囲の人間に分配してしまう。

つまり、彼の横で子供が転び擦りむいたとしたら、その傷を周囲の一夏を含めた人間に無条件で分配する。

全く関係のない人間の傷さえ、彼は分配して、自ら負ってしまうのだ。

彼は言ったはずだ。

初日の遅刻の理由を、『交通事故の現場に出くわしたから』だと。彼は、交通事故の被害者の傷を、無条件に、問答無用に、自分を含めた無関係の周囲の人間に、分配したのだ。

だから彼は、あれほどの傷を負いながらIS学園に登校した。勿論、同等の傷を、周囲の人間に振り分けて。

もつとも、あの程度の傷など彼にとっては日常茶飯事なのだが。

しかもこの能力^{スキル}、彼の思考で入り切りができない^{オンオフ}。

まさに過負荷らしい、害悪^{マイナス}にしかない能力^{スキル}、といえる。

勿論、この会話は、セシリア・オルコットの耳に届くはずもなかった。

『ペイントペイン 広酷塔』。

彼の発したこの言葉を、セシリアは彼のISの『ワンオフ・アビリティー 単一仕様能力』だと即座に判断。

これは代表候補生らしい素早い判断だと言える。

だがしかし、彼はこの決闘において、それを使った様子は無かった。つまり、『ペイントペイン 広酷塔』は発動するのに何か限定的な条件が必要だと判断した。

そこで彼女の取った行動は、

「（これ以上のお喋りは不要……決着を付けますわよ！！）」

一夏の撃墜だった。

彼女は先程までの一夏の言葉には一切反応せず、素早く銃口を一夏に向け、引き金を引いた。

それと同時に念には念をと、銃口を引くのと合わせてビット兵器『ブルー・ティアーズ』の内二基からミサイル弾を発射した。

彼女はビット兵器の操縦の難易度故、他の武装との連携ができないが、それは精密な操作が必要な場合の話。

発射の命令を出すだけならどうという事はない。

「これで終わりですわ！！」

彼女の放った銃撃とビットからのミサイルが、一夏にほぼ同時に着弾。

そして、爆発。

爆発と同時に、セシリアの体を決闘中何度もあつた違和感が今度は全身に襲う。

だが、今の彼女には、些細な事だった。

爆煙で彼の様子はハイパーセンサーでも見えないが、彼が回避した様子はない。

彼女は勝利を、確信した。

「終わったか……………」

千冬は、彼が爆煙に包まれたのを見て、呟いた。

「そうですねえ……………やっぱり、織斑が代表候補生に勝つなんて、無理だったんですねえ」

「いや、そうではない」

「え？」

「私は、『フォーマット初期化』と、『フィッティング最適化』が、……………ようやく終わったと言っただ」

「あつ……………！」

その光景を見た彼女を最初に襲ったのは、驚愕だった。

「まさか……」
『ファーストシフト 一次移行』
「!? 今まで初期設定のまま、私の攻撃を避けていましたの？」

爆煙が晴れ、現れた織斑一夏のISの外装が、変化していた。
無骨でどこか荒々しさがあったボディは無駄な部分がそぎ落とされ
たようにシャープになった。

だがそれは、本当に『必要最低限』と言ったもので、ISの装甲に
してはどこか物足りなさを覚える物だった。

そして何より、変化したのは、『色』である。

先程までの白を基調としたものなのは変わらない。

だが、『^{ファーストシフト}一次移行』後、そこには禍々しい黒い斑模様が刻まれてい
た。

まるで、『白』を『黒』が浸食するかのようである。

「な、なんですそのその姿は！？　いくら『^{ファーストシフト}一次移行』とはいえ、こ
こまで見た目に変化が……………っ！！」

彼女は、シールドエネルギーが回復し空中にユラユラとたたずんで
いる一夏に叫ぶ。

「いやー大変だったよ。白式が思った通りに動いてくれなくて。I
Sにまで嫌われちゃったと思ったよ」

彼は、先程までと変わらない口調で、セシリアに話す。

そこで一旦、セシリアの思考は冷静になる。

いくら相手のISが『ファーストシフト一次移行』し、その性能が上がったところで、操縦者自身の実力が変化した訳ではない。

赤子の握っていたハンドガンが、機関銃に持ち変わったただけだ。

むしろ性能が向上した分、より操縦者の技量が求められる。

この勝負、自分の勝ちには、揺るがない。

「ふん、『ファーストシフト一次移行』には驚かされましたが、変わったのはその禍々しいお姿だけでなくって。それだけで私に勝てるほどISは甘くありませんわ！」

そう言っつて、彼女はレーザーライフルを構え直す。

それを見た一夏はどこか呆れ気味である。

「決闘前にも言っただけど、僕が負けるのは決定事項だよ？ 君がわざわざ頑張る必要ないよ」

彼女は一夏のそんな言葉に耳をかさず、ライフルの引き金に指をかけた。

その時、彼女のIS『ブルー・ティアーズ』から警告の表示がモニターに現れた。

《警告。後方より巨大な熱源反応有り》

その警告に彼女はいち早く反応した。

「（熱源反応！？ それも後方から！？ まさか『ベイントベイン広酷塔』とは背後からの奇襲能力——！？）」

彼女は一旦一夏から視線を外しライフルを反応のあった方に向ける。

だが、そこには熱源反応どころか、兵器の影も形も見えない。

「……………！？」

彼女は一瞬呆然とする。

「（なつ……………何故ですの……………！？ 『ブルー・ティアーズ』は確かに……………！？）」

《警告。下方より未確認ISにロックされています》

その警告に、セシリアは視線だけ向け確認する。
勿論其処には、新手のISの姿はない。

《警告。『ブルー・ティアーズ』右腕部分破損。》

また、彼女のモニターに警告が表れる。
勿論、『ブルー・ティアーズ』は破損などしていない。

《警告。後方より新たな熱源反応有り》

先程の警告が全て表示されない内に、また新たな警告が表れる。

《警告》 前方より敵性IS反応。ロックされています》

《警告》 上方より熱源反応》

《警告》 『ブルー・ティアーズ』左脚部分破損》

《警告》 右方よりIS》

《警告》 後方より》

《警告》 《警告》 《警告》 《警告》 《警告》 《警告》 《警告》 《警告》 《警告》 《警告》

告 《警告》 《警告》 《警告》 《警告》 《警告》 《警告》 《警告》 《警告》 《警告》 《警告》

告 《警告》 《警告》 《警告》 《警告》 《警告》 《警告》 《警告》 《警告》 《警告》 《警告》

告 《警告》 《警告》 《警告》 《警告》

瞬く間に、彼女のモニターは警告の表示で埋め尽くされた。

「いつ一体何がどうなってますの!？」

セシリアは途端にパニックになる。

視界を埋め尽くす『警告』の文字。

今なお増え続けているそれは、彼女の思考を停止に追い込むには十分過ぎた。

そんな彼女を見て、一夏はくくつ、と笑う。

「どう？ 僕から君への勝利の前祝い、気に入ってくれた？」

「!? これは貴方の仕業ですの!？」

彼のその言葉に、セシリアは激昂する。

『ファンクション・フィクション
誤作動』

それが彼のIS『白式』の『単一仕様能力』^{ワンオフ・アビリティ}である。

文字通り、相手のISに誤作動を起こさせる能力である。

彼はこの能力で、セシリア・オルコットのIS『ブルー・ティアーズ』に干渉、センサーに誤作動を起こさせた。

それを聞いた彼女は驚愕する。

「ま、まさか!？ 敵機のISに干渉する『単一仕様能力』^{ワンオフ・アビリティ}なんて

……………」

「どうも僕は、他人に迷惑を掛けちゃうみたいなんだよねえ昔からそんなつもりは全然無いのにさ」

彼はまるで人事のように語る。

「し、しかしソレを私にわざわざ話すとは愚行ここに極まりですね。誤作動と分かればこんな警告、気にする必要などありませんわ」
「あれ、いいの? もしかしたら『本物の警告も』混ざってるかも

よ？」

「っ……………！？」

「まあ、自分で言っておいてアレだけど、そんな心配は杞憂だよオルコットさん」

「はあ？」

「ISも結局突き詰めちゃえば機械なんだよ、オルコットさん。その機械が自分で処理できないほどの情報と誤作動の固まりが一気に流れ込んでくるんだ。するとどうなるかというと、」

その時、まるでタイミングを狙っていたかのように、セシリアのモニターに他の警告を押し分け一際大きな警告が表示された。

《警告。『ブルー・ティアーズ』に深刻なエラーが発生しました。
『シールドエネルギー』『絶対防御』以外のシステムを強制終了します》

「まあこつなるよね」

その言葉と共に、セシリア・オルコットは重力に従い落下していった。

「きゃああああー……っ!!」

そんな可愛らしい悲鳴を上げて、彼女はズドンと地面へと落ちていった。

操縦者の身を守るためのなか、ISは深刻な問題が発生しても絶対防御は切れることはないらしい。

「さてと」

彼はそう言つと、『白式』唯一の武器である近接ブレード『雪片式型』を取り出すと、地面に落ちたセシリアにゆっくり近づく。

「くっ………何で、何で動きませんの!？」

一方、落ちたセシリアはと言うと、『ブルー・ティアーズ』の重さに動なくなりながらも、横たわった状態のまま必死に機体を動かそうとしていた。

しかし、『シールドエネルギー』『絶対防御』以外のシステムが完全に停止したISは、言つてしまえば『無駄に重い鎧』のようなものである。

量子化させた武器を取り出す回路も停止しているため武器を取り出すことも出来ず、それなりの重さのあるISアーマーを動かす為の疑似筋肉も動かないためその場を移動することもできない。

「だから言ったじゃない、オルコットさん」

そこに、近接ブレードを引っさげた一夏が目の前に静かに降り立つ。

「がんばっちゃうから、こうなるんだよ？ 僕なんかを倒すためにやっきになるから、君はこんな状況に追いやられちゃうんだ」

セシリアの表情が、絶望に染まる。

そんな彼女に、一夏は容赦なく雪片を振り上げる。

『ブルー・ティアーズ』は殆どの機能を停止しているものの、『シルドエネルギー』『絶対防御』は生きている。
つまり、試合は続行である。

そして彼は、雪片を突き立てた。

セシリアの、顔の真横に。

「っ!」

ピシッ、とセシリアの表情が固まる。

彼は地面に雪片を突き刺すと、管制室のあるであろう方を向くと、右手を挙げて言う。

「すいません。僕、降参します」

試合を見ていた全員の思考が、止まった。

数秒後、セシリアの勝利を告げるブザーが鳴った。

「あー疲れた。久しぶりに激しい運動したかもしれない」

彼はISを待機状態にすると、うーんと大きく伸びをする。
コキツと小気味いい音が鳴る。

「貴方っ！！ どういうつもりですの！！」

一夏が振り向くと、そこには表情を怒りに染めたセシリアがいた。

「何故貴方は今の状況で棄権なんかしましたの！！ 私に情けでも
かけたつもりで！？ 貴方はどれだけ私を侮辱いたしますの！！」

彼女は憤怒の形相で激昂する。

今ので彼女は、自身のプライドを大きく傷つけられただろう。
そんな彼女の様子を気にした様子もなく、彼はいけしゃあしゃあと
言う。

「そういうけどね、僕も実際もう限界なんだよね、体力的な意味で。」

ほら右腕もこんなに震えちゃって」

「例えそうだとしても！！ 貴方は私にトドメを刺すくらいは出来たはずですわ！！」

「んゝ、まあ他にも理由はあるんだけどね？ ほら、今日は月曜日でしょ？」

「それが一体なんだと……………！！」

「今日、ジャンプの発売日でしょ？ 続き、気になっちゃって集中できなかったんだ」

その言葉に、セシリアの思考が固まる。
そんなセシリアを余所に、彼は歩いて鼻歌を歌いながらピットに戻る。

「あ、そうだ」

彼は思い出したように呟くと、クルリと引き返し、セシリアの元まで戻ってくる。

「言い忘れてたよ」

彼はセシリアの耳元まで顔を持っていくと、彼女にしか聞こえない音量で言った。

「クラス代表就任、おめでとう」

その言葉に、彼女の頭がガソリンを注がれ火を付けたように熱くなる。

「織斑、一夏あああああああああああつ!!!!」

彼女のその叫びが聞こえていないかのように、彼はゆっくりとした足取りで、今度こそピットへ戻っていった。

ピットに戻った一夏を最初に迎えたのは、憤怒の形相をした箒だった。

ダンッと、一夏は箒に胸ぐらを掴まれ、壁に強く叩きつけられる。

同時に、彼女の背中に僅かな衝撃が走ったが、気にもならなかった。

「一夏……………なんだ今の試合は」

「何って？」

「何故貴様は！！ あそこで勝負を投げて負けた！？ お前は言ったな、『自分が負けるのは決定事項だ』と！！ アレはこういう意味だったのか！！ お前は武を嗜んだ者として！！ いや、それ以前に、人として、貴様は最低だ！！」

その、彼女の怒りに、彼は答える。

「今頃気付いたの？」

彼はゆっくり彼女の腕をほどくと、続ける。

「篤ちゃん、一応言っておくよ。僕は、君が思っている何倍も、何十倍も、何百倍も、最低だ」

彼は苦笑気味のいつもの笑顔で、

「最低で、最悪で、————災厄だ」

そう言った。

「僕と一緒に居ると、そんな最低で胸くそ悪い事ばかりだよ、篤ちゃん。だから言っておくよ。僕は君が大好きだから」

彼は笑顔を崩さぬまま、

「僕とは一緒に居ない方がいい。関わらない方がいい。僕は――
――マイナス災厄だから」

静かに、しかし、ハッキリと、そう言った。

彼は、箒を、そして千冬も真耶も無視して、寮の自室に戻っていった。

こうして、クラス代表を決める決闘は、終わった。

彼の予告通り、胸くそ悪い勝利だけを、セシリアに残して。

「そう言えば」

——
いたい。

右腕に、鋭い痛みが走る。

——
イタイ。

背中に、焼けるような痛みが走る。

——
痛い。

腹部に、鈍く重い痛みが走る。

——
ああ、よかった。

彼は、朧気な意識の中、思う。

——今日も、生きてる。

コツコツコツ、と廊下に固い足音が響く。
織斑一夏は、第三アリーナを出て一人寮の自室へと向かっていた。

先程セシリア・オルコットとのクラス代表の座をかけた試合を終えた彼は、ぼんやりと自分の右手に視線を向ける。
右手には、白地に黒の斑模様のガントレットが装着されている。
彼の専用機『白式』の待機状態である。
機体の模様がそのまま待機状態にも反映されてる自らの専用機をぼーっと見つめながら、彼は先程の試合を思い出す。

『零落白夜』

対象のエネルギー全てを消滅させる、『白式』のもう一つの『単一仕様能力』である（対象のエネルギーを消滅させるのと同時に、自分のシールドエネルギーも大幅に消費してしまう諸刃の剣なのだが）。

『ブルー・ティアーズ』に誤作動を起こさせ、セシリアを地へと叩きつけたあの時、『零落白夜』を使用していれば、彼はあの試合に勝利することが出来た。

だが彼は、あるとき『勝利』ではなく、自ら『敗北』を選んだ。
その行為に特に意味はない。
過負荷^{いちが}にとつて、『勝利』とは敗北であり、『敗北』とは勝利なのである。

「……………あ、そう言えば負けたら小間使いだったっけ……………」

ふと、彼は試合前にセシリアと交わした、自分が敗北したときの事件を思い出した。

まあ、いいか。

約束の良いところは、破ることが出来ることだもんね。

そんな事を考えながら、彼は制服のポケットの中にキチンと250円あるのを確認すると、鼻歌を歌いながら廊下を歩く。

先程の試合のことは、既に彼の中から無くなっていた。

サーッと、冷たいシャワーの水が、体を打つ。
セシリア・オルコットは、シャワーの水で体を冷やしながら、先程
の試合を思い出していた。

「（おりむら……………いちか……………）」

試合が始まる前までは、自分の勝利を確信していた。
自分が男なんかに負けるはずがないと。

彼女は、男性に対して良い印象を持っていない。

彼女のもっとも身近な男性である父は、常に母の顔色を伺うような人間だった。

男性なんて、他人に媚びへつらう事しかできない愚かな存在。

彼女の中の男性像は、そんなものだった。

「（オリムラ……………イチカ……………）」

今日の試合だって、彼女は手を抜いたつもりなど無い。

最初こそ本気を出すまでもない、と思っていたが、なかなか粘る彼をみて、そんな感情は捨てていた。

だが、彼女は運が悪かった。

彼は、『普通』と呼ぶには余りに歪んでいて、『強者』と呼ぶには余りに弱くて、『弱者』と呼ぶには余りに腐っていた。

そんな彼にまともに相対し、勝とうとしたが故、セシリアは負けた。

負けて。
負けて。
負けて。
負けて。

そして、形だけの勝利を手にした。

「っ……………!!」

改めてそこまで思い出して、彼女は自分の拳で思い切り壁を殴りつける。

僅かに、拳から血が滲む。

「織斑……………一夏あっ……………っ!!」

彼女は憤怒の形相で、その名を呟く。

「認めてあげますわ……………その腐った根性だけは……………」

もう一度、ガンツと壁を殴りつける。

「私が……………必ず……………」

その眩きは、強く床を叩くシャワーの水音にかき消された。

「…………やっぱり、こうなっちゃったか……………」

大きなモニターが発する淡い光だけが光源の、薄暗い部屋。

そのモニターにはどこから撮影していたのか、つい先程まで、IS学園で行われていた織斑一夏とセシリア・オルコットの試合の映像が再生されていた。

映像を見ているのは、フリルの付いたエプロンドレスにピコピコと細かく動くウサミミの付いたカチューシャをつけた女性——ISの開発者、篠ノ之束である。

彼女はモニターの中で動く白いIS『白式』をジッと真剣な目で見つめる。

『白式』

世界で唯一の男性操縦者、織斑一夏の専用機であり、彼女が直接設計・開発を行った機体である。

もともとは日本のIS開発チームが設計・開発を行う予定であったが、様々な根回しを行い、彼女が自ら開発・設計を行った。

束は、モニターの中で『ブルー・ティアーズ』相手に立ち回る一夏と『白式』を見ながら考える。

ファンクション・フィクション
『誤作動』

彼女は、『白式』の『単一仕様能力』にそんな能力を組み込んでない。
どい

彼女が『単一仕様能力』として『白式』に設定したのは『零落白夜』だ。
ワンオフ・アビリティー

元々、彼の姉である織斑千冬の専用機『暮桜』の『単一仕様能力』も、『零落白夜』である。
ワンオフ・アビリティー

彼女は『白式』に、『暮桜』と同じ『単一仕様能力』が発現するよう設定したし、事実、彼女の思惑通り、『白式』は『単一仕様能力』として『零落白夜』を発現させた。
ファンクション・フィクション オマケ

『誤作動』という誤算付きで。

だが白式には、二つモノ『単一仕様能力』を置いておくことの出来る容量など存在しない。
ワンオフ・アビリティー

スペックの殆どが『零落白夜』が占めているからだ。

それでも白式は『零落白夜』と『誤作動』と言う二つの能力を宿し、そして実際成り立っている。
ファンクション・フィクション

「早く……渡さないとね………」

だが彼女は、その誤算も計算の内だとしても言うのか特に驚いた様子もなく、傍らにそびえ立つISにそつと手を添える。

その機体はどこまでも赤く、朱く、紅い。

「でもまだ……………その時じゃないか……………」

機体の名は——『紅椿』。

「ソレはきつと」(前書き)

「つもい はじめ Project」公式HPが、完成しました。
↓ <http://tsumoihajime.blog.fc2.com/>

「ソレはきっと」

「ううっ……………一夏……………一夏あ……………」

夜、大人も寝静まったであろう深夜、彼女、織斑千冬は泣き声を押し殺しながら幼い弟を――織斑一夏を抱きしめていた。彼女は、抱きしめた弟の頭をそつと撫でる。

抱きしめた弟の体には、目を覆いたくなるほどの傷が刻まれていた。切り傷、青あざ、火傷、とにかく傷、傷、傷、傷。

その傷の量は余りにも異常で余りにも異状。

そしてその傷は、全て実の両親から付けられたものだった。

「一夏あ……………一夏あっ……………」

彼女は泣きながら、弟の名を呼ぶ。

その涙は、自分の無力を嘆くものだった。

まだ小学生の彼女には、弟に暴力を振るう両親を止める術など持たなかった。

ただ弟が無抵抗に殴られ、蹴られ、傷つけられるのを膝を抱えて見ることしか、出来なかったのだ。

彼女は、両親が寝静まった深夜、慣れない手つきながらも弟の傷の手当てをし、泣きながら彼を抱きしめる。

「一夏……………ごめん……………ごめんね……………一夏……………」

ポツツ、と涙が彼の顔の上に落ちる。

自分の顔に落ちたその涙を指で拭いながら、織斑一夏は思う。

何故、自分のことを抱きしめる姉は、泣いているのだろうか。

何故、彼女はこんなにも悔しそうなのか。

何故、自分はこんなにも同情されているのか。

彼は無感情な瞳で、自分をきつく抱きしめる千冬を見つめる。

彼女は涙を零しながら、弟の名を呼び続ける。

チラリと、一夏は横目で壁に掛かってる時計を見る。

午前四時二十分。

今日の日付は、八月二日。

夏の日の出は早い。

もうすぐ夜が明け、『今日』が、始まる。

夢を見ていた気がする。

織斑一夏は、まだ暗い寮の自室で目を覚ました。

部屋に、彼の姉である織斑千冬の姿はない。

彼の自室は姉であり寮長である千冬と同室であるが、彼は姉がこの部屋に戻ってきたのを見たことがなかった。

彼女曰く、仕事で戻らないから実質一人部屋だ、とのことだったがその言葉に偽りは無かったようだ。

もっとも副担任の山田真耶の話によると、もうすぐ新たに一人部屋が宛われるとのことだったが。

彼は寝起きでまだ覚醒しない頭で、ボンヤリと先程まで見ていた夢を思い出す。

彼がまだ物心付く前の、臃氣にしか覚えていない幼少の頃の記憶。暴力を振るう父と母、そしてあの頃から自分に狂おしい程の同情と行き過ぎた姉弟愛を注いでいた姉。

両親の顔は、霞がかかったように曖昧な形で彼の脳裏に浮かび上がる。

彼は両親のことを怨んでいる訳ではない。

両親が自分に暴力を振るっていたと言う事実はどうあれ、『今』の自分があるのは確実に両親のおかげだ。
自分の境遇を恨んだことはない。

『今』の自分があるのは、確実にその境遇のおかげなのだから。

携帯を開いて、今の時間を確認する。

偶然にも、携帯の液晶は四時二十分を表示していた。

だが、今は八月ではなく、四月の上旬。

部屋の空気は、まだ肌寒い。

彼は僅かに残る温もりを手繰り寄せるように布団をかぶり、再び睡魔に身を預けた。

「はい、ではクラス代表は織斑君に決定しました。あ、『一』繋がりでなんだか縁起がいいですね」

朝。

いつも通り授業前のSHRを右から左に聞き流していた織斑一夏だったが、彼の脳は目の前でほわほわとした笑顔を浮かべる副担任の爆弾発言（織斑一夏限定）を聞き逃さなかった。

「あの、山田先生」

「はい、なんですか織斑君」

「いや、なんですかってなんですか？ 何で僕がクラス代表なんですか？ 僕はキチンと、それこそ非の打ち所のないくらい美しい負け方をしたと思うんですが」

「えっとそれは……………」

「私が辞退したからですわ」

真耶の発言を遮ったのは、本来クラス代表であるはずの、セシリア・オルコットである。

「どういうことだいオルコットさん。君は僕に勝ったじゃないか。

君は気に入らない男性を負かせて、クラス代表になれて、僕を小間使いに出来て、それで一件落着じゃないか。一体何が不満なんだい？」

「……………不満、ですって？」

一夏のその言葉を聞いた彼女は、コツコツと音を立てて一夏横まで移動すると、彼の胸ぐらを掴み引き寄せる。

非力な彼は為す術もなく前のめりになり、

「そんなの全てに決まっていますわっ！！」

怒鳴りつけられた。

「あれの何処がつ！！ 私の『勝利』だと言っんですの！！ 人を馬鹿にするのもいい加減になさい！！ 私は認めませんわ！！ あんな巫山戯た私の勝利を！！ 貴方の巫山戯た敗北を！！ そして貴方を、絶対に認めませんわ！！」

彼は怒りと殺意の籠もった目で彼を睨み付ける。

セシリアのその行動に、真耶はオロオロするばかりだが、セシリアの視界には入っていないようだ。

「ですが認めてあげましょう。貴方のその腐った根性と、実力を」

スツ、と彼女の手から力が抜ける。

「だから覚悟なさい」

そしてもう一度、セシリア・オルコットは彼を睨み付ける。

先程とは、違う感情をその目に宿しながら。

「必ず貴方を相手に！！ 完璧な勝利を飾って見せますわ！！ その時まで首を洗って待ってなさい、織斑一夏！！」

彼女は正面から、真っ直ぐに一夏の目を見つめる。

「夏はふっ、といつも通り苦笑気味に笑うと、呆れ気味に答える。

「そうかい、なら楽しみにしてるよ。でも、ソレはきっと叶わない
と思うよ」

—— 僕が、マイナス過負荷故にね。

彼は小さく、そう呟いた。

「IS学園へようこそ」

《『で』『結局君はクラス代表になっちゃったのかい?』『うわー、一夏ちゃんざーまあー!!』『なんだか、今日の晩ご飯は美味しく食べられそうな気がするよ』》

「OK球磨川君絶対にそこを動かないでね。今から君の所へ行つて一世一代の大喧嘩をしようと思うんだ」

夜。

その日の授業も終わり、一夏は山田真耶に寮長室から新しい部屋に案内された後、彼の数少ない友人にして同類^{マイナス}、『球磨川禊』に近状報告と雑談を兼ねて携帯電話で通話していた。

《『でも一夏ちゃんも災難と言えば災難だねえ』『君の話を聞くところだと、なかなか良い場所じゃなさそうだし』『男の子からしてみれば、なかなかどうして浪漫の溢れる場所だと思っただけだねえ』》

「このご時世、プライドの高い女の人ばかりだしね。まあでも、幼なじみと再会できたのは僥倖かな？」

《『ああ』『前話してた幼なじみちゃんだっけ？』『いいなあ一夏ちゃんの周り可愛い娘ばかりで』『ねえねえその筈ちゃんって彼氏いるの？』》

「さあねえ、居ないんじゃないかな。そもそも再会したのがこの四月だし、それ以前に気むずかしい娘だからね」

そんな他愛のない話を、彼らは電話越しに続ける。

「ところで球磨川君は今どの学校に居るの？ 球磨川君しょっちゅう学校廃校にするからよく分からないんだけど」

《『今かい？』『水槽学園で生徒会長させてもらってるよ』『いやーなかなか良い学校だよ』『過^{ほく}負荷にはもったないくらいにね』》
「………また廃^{つぶ}校にしちゃうのかい？」

《『うん、もうそろそろしたらね』『次に行く学校も決めてあるんだ』》

「へえ、準備万端じゃない。どこの学校？」

《『んとね』『箱庭学園』》

「……うへえ。あの異常なほど熱心に僕を勧誘してきた学校かあ………」

一夏は電話口で少しだけ顔をしかめる。

《『あの学校は【フラスコ計画】っていう面白そうなプロジェクトやってるからねえ』『過^{マイナス}負荷の僕らは、いい実験材料なんじゃない^{モルモット}』》

かな?』》

「『僕ら』ってことは……………球磨川君も?」

《『うん』『来たよ、勧誘』『ていうか一夏ちゃんも箱庭に来ればよかったのに』》

「家から遠いんだもん。中学で何にも成績残してないのに学費全額免除っていうのも怪しいと思っただし」

《『今からでも転校……………は無理かあ』『一夏ちゃんも混ざってくれば面白くなるかもなの』》

「国連が許してくれないよ。球磨川君や蝶ヶ崎君達ならIS敵に回しても怖くないだろうけど、僕は裏技使わなければ引き分けに持ち込むのがやっとなんだぜ?」

《『そつか』『まあそれなら仕方ないね』『残念だ』》

「また心にもないことを……………じゃあ球磨川君が箱庭学園に行くのはそれが理由?」

《『それは理由の三割くらいかな』『学費は全額向こうが持つてくれるみたいだからね』》

「残りの七割は?」

《『僕の中学の後輩達が今ちょうど生徒会をやってるのさ』『一夏ちゃんと同じ歳が二人と、君の一個上が一人ね』》

「……………前言つてた『めだかちゃん』と『善吉くん』かい? 球磨川君はその二人にずいぶんご執心だねえ。とくにその『めだかちゃん』に」

《『僕は彼女の事結構好きなんだぜ?』『恋する思春期男子だよ?』

『まあ向こうは僕のこと嫌いみたいだけど』》

「それは『善吉くん』含めて?」

《『うん』》

そこまで会話したとき、部屋のドアをノックする音が聞こえた。

「おりむー、いるー？」

「あ、ごめん球磨川君、友達来たから電話もう切るね」

《『え？』『何々ー夏ちゃん』『もしかして逢引？ 今から逢引！？』『ちょ、できればその娘の写メ送って欲し』》

一夏は球磨川の言葉を最後まで聞かないまま通話を切ると、ドアを開ける。

そこには布仏本音（通称：のほほんさん）と、クラスメイト数名がいた。

「おりむー出てくるの遅かったけどどうしたの？」

「うん、友達とちょっと電話してたんだ。のほほんさんたちこそ、どうしたの？」

「えっとねー、パーティーだよー」

「パーティー？」

彼が首をかしげると、のほほんさんとその周りにいたクラスメイト達は視線を合わせて、いたずらに笑う。

「織斑君の、クラス代表就任パーティー！！」

「と言うわけで、織斑君、クラス代表就任おめでとー！！」

パン、と一斉にクラツカーの甲高い音が響く。

一夏がのほほんさん達に連れられ食堂に行くと、スペースの一部を貸し切って、クラスメイト達がパーティを開いてくれていた。

壁にはご丁寧にも『クラス代表就任おめでとー！！』と書かれた幕が張られている。

「うん、みんなありがとう。なんか気を遣わせちゃったみたいで悪いね。ところでこの人数明らかに二クラス分くらい居る気がするんだけど――」

「ほらほら、そんな細かいこと気にしないで、織斑君も食べて食べて！！」

半ば強引に会話を打ち切られ、周りのクラスメイト達が彼に飲み物や料理を勧めてくる。

しかし元より小食な彼は、愛想笑いでソレを流しつつ、自分が食べられる分の量の料理をお皿にとると、そそくさとスペースの隅に下がる。

『とりあえず騒ぎたい』と言う気持ちも半々だったのだろう、クラスメイト達はお喋りに夢中で彼が下がったことにはまだ気付いていない。

そんなクラスメイト達を観察していると、ふと彼はクラスメイトの輪に加わらず、一人で飲み物の入ったグラスを傾けている生徒を見つけた。

セシリア・オルコットである。

「どうしたんだいオルコットさん。一人で黄昏れて詩人氣どりかい？」

彼はそんなセシリアに声を掛けると、彼女の隣にすっと座った。

「……なんだ、貴方ですよ」

彼女は、隣に座った一夏を見て若干ながら顔をしかめながらも対応する。

「そんなに怖い顔しないでくれよ。少年漫画的な『お約束』なら、一緒に食事を取ればみんな仲間なんだぜ？」

「……貴方はその腐りきった根性より先にその漫画脳をどうにかするべきですわね………」

いつもの儚げな笑顔にニヤニヤ成分をプラスしたような笑みを浮かべながら言う一夏に、セシリアは呆れながらも横目で彼を睨み付ける。

「……私は、男性にいい印象を持ってませんわ………」
「うん？」

「女性に媚びへつらつて、顔色を伺うことしかできない愚かしい生き物……私は男性をそう思ってたし、今も思ってますわ」

彼女は少しだけ遠い目をしながら、語る。

「でも、貴方は今まで出会ってきた男性とは全く違いますわ。いつも周りに愛想笑いを振りまいて、吹けば倒れるんじゃないかと思うくらい弱々しくて、その癖何を考えてるか分からない」

「……………」

「私は、貴方が怖い。貴方の裏のありそうな言葉が怖い。その考えを読みとれない混沌とした目が怖い。何をし出すか分からないその行動が怖い。私は貴方の全てが怖くて、大嫌いですわ。正直、貴方が本当に織斑先生の弟か疑いたくなりますわ」

そこで彼女は一旦言葉を区切ると、顔だけを彼の方に向けて言う。

「貴方……………一体何を企んでいますの？」

織斑一夏は、何も答えない。

ただ人畜無害そんな笑みを浮かべて、無言でセシリア・オルコットを見つめている。

彼女も同様に視線を逸らそうともせず、真っ直ぐ一夏の目を睨み付ける。

「……買いかぶりすぎさ。僕は何にも企んじやいないよ。基本的に僕の企みは失敗するんだ。こう見えて長い物に巻かれて大衆に流されるタイプなんだぜ?」

ふっ、と自嘲気味に笑うと、彼は先に視線を逸らし呟いた。

「どうだか。貴方はペテン師なんかよりよっぽど質が悪いですわ」
「出会って一ヶ月も経ってない人に言われると、ちょっとへこむなあ」

彼は再びいつも通りの儚げな笑みを浮かべる。
その時、彼のポケットの中で携帯電話のバイブレーションが振動する。

「あ、ごめん、ちょっと外すね。電話掛かって来ちゃった」

「できれば二度と帰ってこないで欲しいですわね」

「そろそろ泣いちゃうよ、僕?」

そんな軽口を言いながら、彼は一旦外に出て電話の通話ボタンを押

す。

「もしもし、久しぶりじゃないか。どうしたのいきなり……………あ
あそう言えば今日だったっけ来るの……………え？ 受付って……………知らないよ、僕だつて未だに迷うんだよ？ ……もう、今どこにいるんだい……………ああ、そこなら真っ直ぐ行つて突き当たり右だと思うよ
うん。……………僕？ ああ、なんか成り行きでクラス代表になっちゃつて……………ちよつと何で爆笑してるのさ……………もう、早く手続きいきなよ……………じゃあね」

ほんの三分くらいの短い時間、彼は携帯電話で会話すると、携帯電話をボタンと閉じる。

彼はニコリと、小さく笑みを浮かべる。
いつもの儚げなモノではなくどこか楽しげな、まるで新しい玩具を楽しみにしている子供のような。

「一夏ここに居たのか」
「うん？」

振り返ると、そこには彼の幼なじみ、篠ノ之箒が立っていた。

「やあ箒ちゃん。どうしたんだい？」
「いや、お前を探しててな。新聞部の先輩がお前を取材したいって来てるんだが……………」

「ああ、ごめん。すぐに行くよ。ちよつと友達から電話掛かってき

てたからさ」

彼は儚げな笑みを浮かべながら、食堂に戻る。
ほんの少しの狂気を交えた、小さな笑みを浮かべて。

「あーやつと見つけた。無駄に広いわねーIS学園」

同時刻、髪をツインテールにまとめた小柄な少女が、転校手続きのために窓口に立っていた。

「ごめんなさいね。案内は用紙にあったはずだけど、ちょっと不十分だったかしらね」

「あーいいのよ、何事もちょっと足りないくらいが丁度良いの。……で、ここに名前とか書けばいいのね」

対応した学園の教師と何とも無しに談笑する少女。
彼女は書類に必要事項を記入しながら会話を続ける。

「そういえば、私は何組の所属になるの？」

「ちよつと待ってね……………えーつとあつた、貴女は二組ね」

「ふーん……………ちなみに、噂の『男の子』は何組？」

「あ、やっぱり気になる。織斑君は一組よ。しかもクラス代表」

「へえ。素人なのにスゴイじゃない。……………ところで、二組のク

ラス代表って誰？ できれば、部屋も教えて欲しいんだけど」

「まあ……別に良いけど……どうするの？」

「いやあ、中途半端な時期に来たから、せめて代表には顔見せとこうと思ったのよ。まだ七時半だし、遅い時間じゃないでしょ？ ……

…はいこれ、書き終わったわよ」

「貴女意外と律儀なのね。……はい、確かに受け取ったわ。じゃあ貴女の部屋はこの部屋ね。二組代表の部屋は貴女の二つ左隣の部屋よ」

「そう。ありがとね」

「では、IS学園へようこそ。 鳳鈴音さん」

「アンタと一緒にしないでくれない？」

「ねえ織斑君、転校生の噂聞いた？」

朝、織斑一夏がパラパラと『週刊少年ジャンプ』に目を通しながら教室に入ると、クラスメイト達は彼にそんな話をもちかけた。

「転校生かい？」

「うん、なんでも中国の代表候補生らしいよ」

「ふーん」

「……………織斑君、もしかして興味ない？」

「いやー、べつつにー」

クラスメイトの一人にそう言われるが、彼はそれに適当に答える。受け答えはするものの、彼の意識は転校生より手元のジャンプへ行ってるようだ。

「その転校生二組に転入してくるんだけど、なんとクラス代表になっちゃったんだって」

「あれ？ 二組の代表ってもう決まってたなかった？」

「うん、そうなんだけど、昨日その子がクラス代表辞退して転校生に譲っちゃったらしいよ」

ペラリ、と一夏はジャンプを捲りながらクラスメイト達の会話を聞

き流す。

「ふふん、この私の存在を今さら危ぶんでの転入かしらね」

「オルコットさん、僕には君の一言一言がもうフラグの気がしてならないんだけど」

「何か言いました?」

セシリアの一言を、一夏はジャンプから一ミリも逸らさず切り捨てる。

キツと彼女は一夏を睨み付けるも、本人は全く気にした様子もない。

「ま、オルコットさんが心配するような事はないと思うよ」

ボタン、と彼はジャンプを閉じて机の上に置くと、そう切り出した。

「君はその転校生に負けることはないだろうさ。というか、きっと張り合う機会なんてあんまりないと思うけどね」

「あら、珍しく私を持ち上げますのね。今日は雪ですの?」

「事実だよ。生き難き生きて、負け難きを負けてきたのが僕らだからねえ——」

——ね、鈴ちゃん」

「ちょっと、アンタと一緒にしないでくれない？　まあ事実だから否定はしないけどさあ」

『——っ！？』

突如も突如。

唐突も唐突。

まるで最初からそこに居たかのように、彼女は居た。

布仏本音と同じくらいに小柄な体格。

ツインテールにまとめた髪。

全く見覚えの無い少女が、それが当然かのように一夏の横に立っていた。

「久しぶり、一夏」

「しばらくぶりだね、鈴ちゃん」

そして二人は、それが当然かのように挨拶を交わす。

「それにしても、アンタよく私が居るって分かったわね」

「何となく感覚だね。『幼なじみ』って言葉が適当なくらい長い付き合いだからそれなりに分かるよ」

戸惑うクラスメイトの視線を完全に無視し、一夏と少女は何事もなかったかのように談笑を始める。

そこにはクラスメイトの誰にも見せたことのない楽しげな表情で喋る彼が居た。

「え……？ 今、あの娘……どこから」

「なんか、瞬間移動してきたみたい……」

「て言うか、あの娘誰だろう……」

クラスメイト達は、いきなり現れた少女を遠巻きに見ながら、小声で会話を交わす。

それこそ彼女たちの目には、先程まで誰もいなかった空間にいきなり人が現れた様に見えたのだから、この反応は当然と言えた。

彼女たちはいきなり現れた少女を横目で見ながら、ヒソヒソと会話する。

「……………何ジロジロ見てんのよ、何か用？」

ふと、好奇と困惑の入り交じった視線が鬱陶しくなったのか、ツインテールの少女がクラスメイト達に不機嫌を隠そうともせずになんと言放つ。

「いやいや、鈴ちゃん。君は普通に教室に入ってきて普通に僕の所に来たつもり何だろうけど、実際ここみんなには君がいきなり僕の隣に現れたようにしか見えてないよ」

一夏は、そんな彼女に苦笑気味にツツコミを入れる。

「ていうか鈴ちゃん、そろそろ自分の教室に帰った方がイイよ」
「何よツレないわね。そんなに私と話すの嫌なワケ？」
「いや、そうじゃなくてさ」

彼はそこで言葉を切ると、視線をチラリと少女の後方に向ける。

「そろそろ鬼神が降臨するから」

彼がそう言つのと同時に、教室にスパンツ、と言つ音が響く。

「つつ！」

「久しぶりだな鳳。つもる話もあるのだろうが、もうすぐHRだ。戻れ」

「あれ？ 誰かと思ったら千冬さんじゃない。久しぶり」

「ここでは織斑先生だ。あと次までにその言葉遣いを直せ。正直プライベートでもそこまで馴れ馴れしくされると逆に困る」

「はいはい。小言はいいですよー。それじゃ一夏、昼休みにね」

ツインテールの少女はそう彼に言つと、現れたときと同様に唐突に、何の前触れもなくその姿を消した。

「お、織斑君、今の娘は一体……」

クラスメイトの一人が顔を引きつらせながら、おずおずと言った様子で彼に尋ねる。

「ん？ さっきまで君たちが話してた娘だよ」

「え？」

彼はいつもの儚げな笑みを浮かべて、言う。

「鳳鈴音……彼女が二組のクラス代表の転校生だよ」

その言葉に、彼のクラスメイト達が色めき出す。

「えっ、さっきの娘が!？」

「ていうか織斑君知り合いなの!？」

「二人の関係は!？ 仲いいの!？」

「あーその、答えたいんだけど、今は……」

「騒ぐなガキ共」

彼がそれとなしに視線をチラチラと後方に送るも時既に遅く、彼女らの頭に出席簿が炸裂する。

彼女らが叩かれると同時に、その場にいた全員の頭にバスンとそれなりの衝撃が走る。

『っ!』

一夏の過負荷である『マイナス広酷塔ベイントベイン』。

その能力によってその衝撃は無条件に無差別に、平等に分配される。

「……HRだ。席に着け」

勿論、それは本人である織斑千冬も例外でなく、頭を軽く押さえながら千冬はそう言った。

担任の織斑千冬に促され、彼女たちは各々の席に着く。

自分の席で千冬の話聞きながら、篠ノ之箒は考えていた。

それは、先程教室に現れたツインテールの少女、凰鈴音の事である。

「（あの鈴という女……………一夏と……………『同じ』だった……………）」

彼女を一目見たときに感じた、あの感覚。

心の底から湧き上がる不快感。

本能が彼女を無条件に拒む。

思い出すだけで嫌な汗が吹き出る。

それは、この学園で久しぶりに一夏と再会したときに感じたモノと、『同じ』。

『似ている』のではなく、『同じ』。

「（千冬さんは……………気付いているのだろうか……………いや、気付いていないはずがない、か）」

彼女は、教壇で連絡事項を伝える担任を見る。

先程の様子から、あの少女とは知り合いなのだろう。

「（それに一夏は、あの女を『幼なじみ』と言っていた……………私

が引っ越してしまった後に知り合ったのだろうか……………？」

チラリと、彼女は視線を千冬から自分の席で千冬の話聞き流している一夏に移動させる。

そこにあるのは、いつもと同じ、儚げな笑顔。

「（一夏…………私の知らない間に、本当に何があったんだ……………）」

彼女は、胸の奥が締め付けられる感覚に少しだけ顔を歪ませ、一夏に視線を送る。

当然、彼が視線に気付くことは無かった。

「（あの鈴という方……おそらく噂になってた、中国の代表候補生ですわね）」

セシリア・オルコットも篠ノ之箒と同じく、担任の話を聞き流しながら、思考の海へとその意識を沈めていた。

「（私自身、皆の前ではああ言いましたが、仮にも代表候補生なのでそれからそれなりの実力者なのでしょう……今度は、油断はしませ

んわ)」

一瞬、クラス代表を決めるために行った一夏との試合が脳裏をよぎり、不快感が胸に広がる。

「（ですが…………あの瞬間移動…………なのでしょうが…………とにかくあのいきなり現れたのは気になりますわね…………ISの『単一仕様能力』？ しかし、ISは待機状態だったはず…………全く、織斑一夏といい、考えれば考えるほど訳が分かりませんわ。織斑一夏とも知り合いのようですし）」

胸の中の不快感は広がり続ける一方ではあるが、それでもセシリアは思考の海を深く潜る。

「（しかし…………あの鈴さんを見たときの『あの』感覚…………胸焼けするような不快感、底知れない混沌の様な恐怖は…………まるで、織斑一夏と、…………同じでしたわね）」

それは奇しくも、篠ノ之箒も同時に考えていたこと。

織斑一夏と相対したからこそ分かる、清も濁もごちゃ混ぜにして出来た様な混沌とした何とも形容できない感覚を、箒とセシリアは感じたのである。

「（あの様子だと、篠ノ之さんも気付いてますわね……………本当、あの男の関係者はまるでビックリ人間ショーですわ）」

ふう、と大きく彼女は溜め息を吐くと、思考の海から上がり、教壇に立つ織斑千冬に視線を向ける。

世界最強の称号を持つ彼女の目には、自分の弟はどう映っているのだろうか。

そんなくだらなくて、考えても答えなど出るはずのない疑問をぼんやりと考えながら、彼女は残りのHRの時間を過ごした。

「でもどっかしら？」

凰鈴音の十五年間の人生は、特別幸せでも、特別不幸でもなかった。

普通の両親の間に出来た普通の女の子で、ある時期までは普通に平
凡でそれなりの生活をしていた女の子。
それが凰鈴音だった。

彼女はとても活発な性格で、何事にも興味を持ち、何事にも挑戦す
る、行動派でアクティブな子供だった。

それは彼女の根幹であり、今も昔も変わってはいない。

ただ一つ、あるとするならば。

彼女は、何においても他人に『勝つ』ことができなかった。

同年代の子供とかけっこをすれば、彼女は常に最下位だった。スポーツをすれば、活躍するどころか何一つ結果を残せなかった。チーム戦のスポーツなら、チームの足を引っ張った。それはゲームに変わっても、勉強にかわっても同じだった。

彼女が根っこからの過負荷マイナスならば、ここで『勝利』を諦め、これから先にある数多の『敗北』を甘んじて受け入れたであろう。

だが彼女は、『勝利』を決して諦めなかった。

何度努力の途中で挫折しようと、
何度他人から蔑まれようと、
何度言葉だけの同情をかけられようと、

彼女は、『勝つ』事に異常なまでの執着をみせた。

それでも、

彼女の手が『勝利』に届くことは無かった。

ここで一度でも、どんな形でも、彼女が『勝利』を勝ち取っていれば、彼女はそのままの、活潑な明るい普通の少女になれたかもしれない。

そんな近くて遠い『勝利』という光が、彼女の心を少しずつ歪めていった。

次第に、彼女の心境にも変化が表れてきた。

——正々堂々、正面からやって勝てないのなら

——『勝負をする前』に勝てばいいじゃないか

それ以降彼女と競い、勝負をする者は、勝負の前になにかしらの『不幸』に会った。

ある者は、階段から落ち怪我を負い。

ある者は、フラリと赤信号から飛び出し、重傷を負った。

それらはまるで、見えない何かにトンと押されたように。

そして彼女は、形式的ではあるが、次々と『勝利』を手にした。
彼女は渴望していた『勝利』を手にし、心から喜んだ。

だが、それでも彼女は、本当の意味での『勝利』を手にすることは、
後にも先にも叶わなかった。

そんな彼女の歪マイナスんでいて、それでいて切実な『勝利』への執着が、
彼女の心を過負荷へと変えていった。

そして、小学校四年生の時。

彼女は一人の、織斑マイナス一夏と出会う。

午前中の授業も終わり、IS学園は昼休みに入った。

織斑一夏は座学によって固まった体をうーん、と伸ばしてほぐす。

ようやくIS学園の授業にも慣れてきた彼であるが、それでも授業を受ける上での基礎知識は全く足りていない。

そんな状況ではあるものの、彼はそんな学園生活をそれなりに楽しんでいた。

「一夏、お前は何を頼む？」

ふと、彼の前にいる篠ノ之箒から声がかけられる。

今、彼が居るのはIS学園の食堂スペース。

生徒のほとんどがここで食事を取る。

勿論、それは織斑一夏も例に漏れない。

自炊どころか家事のほとんどをこなせる彼ではあるが、学園ではそ

れなりに多忙な生活を送っているため、なかなか料理をする時間を最近取れずにいた。

「んーそうだねえ。正直僕はフルーツのゼリーとかでもいいんだけど」

「食事くらいはキッチンと取れ。だからそんなに見た目が貧弱なままなのだ」

「そんなこと言われてもねえ……。うーん分かったよ。じゃあその『カツ丼大盛り』でいいや」

「ゼリーで結構とか言ってた方が随分冒険しましたわね！？ 半分も食べきれず残す光景が目に見えているんですけど！？」

「うん、ていうか何で居るのオルコットさん。いや僕としては別に構わないんだけど、君は僕のこと嫌いじゃなかった？」

「勝つために必要なのはまず情報ですわ。次に貴方を完膚無きまでにボコボコにするその為には、私一切妥協しないと決めましたの」

「お前が一夏の食生活を把握してどうISに活用するのか、ものすごく気になるんだが……」

「な、何ですの篠ノ之さん、その呆れた視線は！？ 貴女もISと剣道を混同させてやりきったつもりになってるではありませんか！
！」

箒とセシリアが言い争いを始めたのを、一夏は華麗にスルーし（本人が蒔いた種なのではあるが）、どうするかなーと真面目に昼食のメニューを検討し始めたその時、

「あーお腹空いた。一夏は何食べるの？」

朝と同様彼女、凰鈴音は唐突に、何の前触れもなく一夏の隣にその姿を現す。

言い争っていた筈とセシリアも驚きからか思わずお互い口が止まり、周りにいた生徒もいきなり現れた少女に驚愕の表情を表していた。

「……………あのねえ鈴ちゃん。本当にびっくりするからそういう登場するのやめない。僕も周りも」

「えー、でもいきなり表れて飄々とするだけしといて何もせず消えるキャラって格好良くない？」

「週刊少年ジャンプでもあんまり類を見ないキャラクターだね。斬新すぎて担当さんからボツが出ると思うよソレ」

そんな周りも意に介さず、彼らは何事もなかったようにメニューを選びつつ談笑を始める。

一部の生徒にとっては軽いデジャブな光景である。

「……………一夏、結局お前は何を頼むんだ」

筈は少し声のトーンを低くして彼に尋ねる。

放置されていた事が若干不愉快だったのか、その声には僅かな怒りが込められている。

「ああ、ごめん。先行って席を取っててくれない？ 僕ももう少しかりそうだから」

そんな箒の心情を知ってか知らずか、はたまた知っててやっているのか、彼は一言そう言っただけでまた鈴との談笑に戻ってしまった。

「……………いくぞ、セシリア」

「ちょ、ちょっと箒さん！？ あの二人を放っておいてもよろしくて！？」

「席を取っておいてくれと言っただけだ。あの二人とは後から嫌でも顔を突き合わせることになる」

箒は注文を済ませると、そう言っただけで席を確保するために一人でさっさと行ってしまった。

結局、量的にも無難なサンドイッチを注文した一夏は、ラーメンの乗った盆を持って付いてきた鈴と一緒に箒とセシリアが確保した四人掛けの席にやってきた。

遅くなってゴメンねー、といつも通り儂げな笑顔を浮かべながら言う彼の表情に悪びれた様子はない。

「で、結局、ソイツは誰なのだ、一夏」

箒は、一夏の隣で素知らぬ顔でラーメンをすすっている鈴に視線を向けながら尋ねた。

「んー、幼なじみでー、親友？」

「何でそこだけ疑問系なのよ？」

「幼なじみ？ 私はそいつを知らんぞ？」

「篝ちゃんが引つ越しちゃったのとはば入れ違いで越してきたからねー鈴ちゃん。そりゃあ篝ちゃんは知らないよ」

「ねえ一夏、そっいえばこいつら誰？」

「僕の幼なじみと、同じクラスのイギリス代表候補生（笑）」

「あー、なるほど」

「お待ちなさい、何で貴女今の説明で納得しましたの！？」

一夏の説明にセシリアが食って掛かるも、当の本人は知らん顔でサンドイッチをパクつき始める。

セシリアは口の端を引きつらせながら、さらに言葉を紡ごうとしたとき、ラーメンを半分ほど食べ終えた鈴が口を開いた。

「そう言えば、一夏って一組の代表なのよね？」

彼女は、思い出したように一夏に尋ねる。

「ん、そうだよ。それがどうしたの？」

「いや、後でしようと思ってただけ、いいわ。手間が省けるし」

「何の話だい？」

「宣戦布告よ」

「今度のクラス対抗戦、必ずアンタに勝つ。そして、私の人生で最初の、綺麗でキレイな真つ白星を飾るわ」

彼女はニヤリと一夏の顔を見て、告げる。

一夏は瞬間驚きの表情を見せるも、すぐにその顔に、同じようにニヤリとした表情を作った。

「いいね。なら僕も、君に勝って人生最初の白星をつける事にしよう」

数秒間、彼らは黙ったまま視線をぶつけ合った。

スッ、とその場の空気が一気に寒くなったような感覚を、篁とセシリア、そして周りで聞き耳を立てていた生徒達は感じた。

が、それも数秒間のこと。
一夏はいつもの儚げな笑顔に、鈴は楽しそうな純粹な笑顔に表情を崩した。

「お待ちなさい」

そこに割って入る、一人の生徒——セシリア・オルコットがいた。

「何よアンタいきなり。空気読みなさいよ」

「そうだぜオルコットさん、この空気の中割ってはいるなんて余程空気が読めないかただの馬鹿だよ？」

「お黙りなさい」

一夏からの注意と罵倒が混じった言葉を彼女は一蹴する。
そして、鈴に向かってビシッと人差し指を突きつけ、告げる。

「決闘ですわ」

あれ、一週間前にもこんな光景があったような？

一夏と筈を含めた、その場でことの成り行きを見ていた一年一組の生徒達の心は、この時確かにシンクロした。

「……………オルコットさん、いくら何でもソレはないぜ？ 君はい

つから決闘趣味、もしくは決闘脳になったんだい？」

「なに？ 決闘？ いいわよ、相手になるわ。私の『スキドレバルバデッキ』が久しぶりに火を噴くわよ？」

「二人ともちよつと黙ってる」

片方呆れ、片方ノリノリの表情を見せる過負荷組を、^{マイナス}筈が一言でたしなめる。

「その織斑一夏に宣戦を布告するのは大いに結構。ですが、その前にこの一年一組在籍のイギリス代表候補生、」

そこでセシリアは一旦言葉を切り、言う。

「この『姫の涙』の二つ名をもつ、セシリア・オルコットを倒して
からにして頂きませんことありませんわっ!!」

「（うわー……………）」
「（セシリアさん……………）」
「（……………それは無いよセッシー……………）」
「（『プリンセス・ティアーズ
姫の涙』……………）」

その場にいた生徒達は、心の中で絶句した。
周りの微妙な反応とは裏腹に、何故か本人は誇らしげだった。

「へえ……………面白いじゃない……………」

しかし彼女、凰鈴音は意外にも、セシリア・オルコットに向かって挑戦的な笑顔を向けた。

「でもどうかしら？ この『勝ちたがり』^{グリード}と呼ばれた私相手に、そう上手くいくと思ってるのかしら？」

「（アレエっ！？）」

「（ノってきただとおっ！？）」

「（『勝ちたがり』^{グリード}って……………）」

意外とお互いノリノリだった。

そのまま二人は、ゴゴゴ、という効果音が付きそうな勢いで、お互い挑戦的な笑みを浮かべたまま睨み合う。

「おいおい待ってくれよオルコットさん。この前はアリーナの使用許可取るのに結構な時間がかかったの忘れたのかい？ このままだ

と君たちの決闘はまた一週間後になっちゃうぜ？」

「ふん、ご心配には及びませんわ。私、定期的に個人でアリーナの使用許可を申請して個人練習をしていますの。真面目に不真面目している『誰か』とは違って。今日がその申請日ですの」

『誰か』の時に一夏は視線を周りから感じたが、知らんふりをすることにした。

「ならいいわ。今日の午後、まずはアンタをボッコボコにして景気づけと行こうじゃないの」

「やってみるといいですわ。中国代表候補生の実力、見させて頂きますわよ」

その言葉に、鈴はふつ、と笑う。

「じゃあ、一夏。私はそろそろ戻るわ。また放課後にね」

「うん、じゃあね」

そう言う彼女、また唐突に、前触れも無く、その姿をフツと消した。

彼女を知らない生徒達は、その光景を見てまた驚く。

先程まで鈴が座っていた場所を、彼は数秒間無表情で見つめる。

彼は、無表情のまま一口、サンドイッチを嚙った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6621v/>

IS ~ 織斑一夏は負完全 ~

2011年10月10日00時59分発行